



# 人を想う心



令和7年度文部科学省  
新時代に対応した高等学校改革推進事業  
(普通科改革支援事業)  
実施報告書



滋賀県立守山北高等学校

## 新学科「みらい共創」の実践をととして

創立当初より、地域に根差した高校を目指し、輝く未来に英知と理想を求めつつ、自立の心を育み、「はつらつ」「すこやか」「たくましく」を創設の教えとし、校歌に歌い継いでおります。卒業生は、各界において力量を発揮し活躍しており、2004年（平成16年）からは「ほら ここに 人を想う心がある」の言葉をスローガンに教育活動を行ってまいりました。生徒は、こうした伝統や教えを受け継ぎ、多様性を尊重し自他を大切にすることを育み、未来に向かって自らが課題解決をする気概をもって学び続けてくれているものと期待しています。

今、我々は変化の激しい先行き不透明な時代を生きています。人口減少や少子高齢化、グローバル化や地球環境問題など社会構造の変化や、生成AIやメタバース、ビッグデータ等の科学技術の進展は、我々の予想をはるかに超えたスピードで進行しています。これまでの社会や制度の延長線上では対応できない段階になっており、こうした情勢への適応だけでなく、自ら未来を切り拓く、多様な人々との協働の中で主体的に答えを見出しながら、時代の変化にたくましく向き合い持続可能な社会づくりに参画する人づくりを図ることが求められています。

令和5年度から文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革事業（普通科改革支援事業）」の指定をいただき、これまでの地域社会と共にある学校としての取組をさらに発展させるべく、「地域をフィールドとした学び」と「ウェルビーイング」を柱に、多様性を尊重し、他者と協働しながら、よりよい地域の未来を創造することをコンセプトに研究を進め、令和7年度には新学科「みらい共創科」を開設いたしました。

「みらい共創科」で学びを進めた1期生からは、次のような声がありました。

「普通科だとできない経験。地域の問題点を知り、解決策を話し合う中で、地域の一員として貢献しようという前向きな気持ちになれた。」

「他の教科だとほぼ正解があって、正解のない課題に取り組むのが、『みらい共創』だと思った。」

「失敗をどんどん経験したい。自分の成長のためには殻を破ることが必要。」

令和7年度は、学校設定教科「みらい共創」と総合的な探究の時間の探究活動を軸に「地域とつながる授業」を展開しました。単なる知識の修得ではなく、地域資源を活用した学びを通じて、主体的に課題を発見し、解決を模索する力や、コミュニケーション能力や多様な価値観を尊重しつつ、他者と協働する力を育成する学びに努めました。こうした学びを通して、生徒は学校の中だけの学習では得ることのできない力を育み、生徒たち自身が自らの成長や課題を認識できていると感じています。また教員にとっても教室とは違う一面や成長する生徒の姿を目の当たりにし、地域協働や探究活動が普通科の学びの形を変えていく流れにあることを実感しています。そして、今後も「みらい共創」の学びを軸にして、新たな普通科教育のあり方の実践と研究を継続してまいります。

最後になりましたが、本事業の推進および新学科のスタートにあたり、ご指導ご支援をいただきました文部科学省、滋賀県教育委員会、運営指導委員の皆様をはじめ、企業、地域の皆様方等、多くの方々にご心より感謝申し上げます。特に、高校側の無理なお願いも聞き、熱心にかかわっていただいた守山市をはじめ地域の皆様に敬意を表し、厚くお礼申し上げます。今後とも、本校の教育活動へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和8年3月

滋賀県立守山北高等学校  
校長 杉原 真也

令和7年度 文部科学省  
「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」実施報告書

目次

○新学科「みらい共創」の実践をとおして	1
○目次	2
第1章 本校の概要	
1-1 所在地	3
1-2 設置学科および在籍生徒数	3
1-3 スクール・ミッション	3
1-4 スクール・ポリシー	3
第2章 令和7年度研究開発の概要	
2-1 事業の実施計画の概要	4
2-2 事業の実施日程	21
2-3 事業の実施概要	22
(1) カリキュラムの検討内容	22
(2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法	46
(3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法	47
(4) 運営指導委員会の体制および取組	52
(5) コンソーシアムの体制および取組	53
(6) コーディネーターの配置および活動内容	64
(7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況	66
(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価	69
(9) 管理機関による支援体制	69
(10) 成果普及のための取組	70
(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組	72
(12) 他の事業との関係	75
第3章 研究開発の内容	
3-1 運営指導委員会	76
3-2 先進校視察	83
第4章 参考資料	
4-1 改訂版学校パンフレット	90
4-2 目標設定シート	93

## 第1章 本校の概要

### 1-1 所在地

〒524-0004 滋賀県守山市笠原町 1263

### 1-2 設置学科および在籍生徒数（令和7年5月1日現在）

	1年	2年	3年	計
普通科	96	117	120	333
みらい共創科	37	—	—	37
計	133	117	120	370

### 1-3 スクール・ミッション

- ① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
- ② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
- ③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

### 1-4 スクール・ポリシー



## 滋賀県立守山北高等学校 スクール・ポリシー



#### スクール・ミッション ～目指す学校像～

- ① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
- ② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
- ③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

#### このような生徒を待っています (アドミッション・ポリシー)

- ① 高校生活に目標を持ち、学習意欲の旺盛な生徒を募集します。
- ② 部活動や生徒会活動に積極的に取り組み、学校や地域の活性化に貢献できる生徒を募集します。
- ③ 地域課題に関心があり解決に向けての取り組みや地域との協働活動に意欲的な生徒を募集します。
- ④ 互いの個性を認め合い、相手の立場に立って物事を考えられる生徒を募集します。

#### このような教育活動を行います (カリキュラム・ポリシー)

- ① 地域をフィールドとした体験的な学びと地域課題をテーマに、SDGsの視点から探究学習に取り組めます。
- ② キャリア教育の充実と多彩なカリキュラム、学びのDX等により学力向上に取り組めます。
- ③ 主権者教育や読書活動などにより、思いやりの心、規範意識などの社会性を育てる教育活動に取り組めます。
- ④ 生徒一人ひとりを大切に、個に応じた支援に取り組めます。

#### このような生徒を育てます (グラデュエーション・ポリシー)

- ① 「人を想う心」を大切に、多様性を尊重する生徒を育成します。
- ② 自尊感情を育み、自らの個性や能力を存分に発揮することができる生徒を育成します。
- ③ 起業家精神にあふれ、地域の課題解決に向け、自ら考え行動する生徒を育成します。
- ④ 豊かなコミュニケーション能力を備え、他者と協働しながら地域の未来を創造する生徒を育成します。

令和5年3月策定

## 第2章 令和7年度研究開発の概要

### 2-1 事業の実施計画の概要（事業申請時のもの）

#### ■実施計画書（所属等は令和7年5月現在）

##### 2-1-1 事業の概要

###### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	滋賀県立守山北高等学校 (もりやまきた)	地域社会学科	令和7年度	○

###### (2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40人	学年制	みらい共創科

###### (3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

守山北高等学校では、滋賀県教育研究事業「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定を受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実を目指す教育の研究を行ってきた。また、「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定も受け、自己を振り返り、変容を確認する取組を進めることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめ、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を推進することで、自分の将来を展望したくましく生き抜く態度や能力を身につける教育の研究に取り組んできた。

具体的には、アクティブワーキングとして、興味関心ある学問や職業について、専門家や先輩起業家の講演を聞いたり、SDGsの17の目標の一つを選択して地域課題と結びつけ、福祉施設などの関係機関へフィールドワークに出かけるなど、NPO法人と連携して、グループ探究や発表などを実施し、地域の課題や魅力に着目した実践的な学びを推進する素地が培われてきたところである。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では2040年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の1つとしている。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となる。

守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や「三方よし（＝ウェルビーイングにつながるもの）」の文化的土壌を受け、この地域社会に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、NPO等と協働した教育活動を展開することで、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が生まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への

歩みに取り組む新学科の設置を予定している。その主な教育内容は、学校設定教科「みらい共創」を軸に、次のような科目内容を考えている。

「みらい共創Ⅰ」では、多様な人たちとの共創に必要なソーシャルスキルと、SDGs や MLGs といった社会的な課題やウェルビーイングの基礎知識を習得し、自身や他者、地域社会も幸せになる視点の拡張を目指す。また、地域や企業等と連携して、提案された課題に対してグループによる探究活動を通して企画提案を考察し、アントレプレナーシップの理解を深める。

「みらい共創Ⅱ」では、1年次での学びをもとに、実践型インターンシップ（もりきた版デュアルシステム）に取り組み、現場での課題発見とその解決策について、インターンシップ先の担当者から指導・助言を受けながら取りまとめ、全校生徒への成果発表を行う。あわせて、ウェルビーイングの視点から企業や業界、地域社会が抱える課題に対して、高校生である自分自身にできることや解決策を考えるマイプロジェクトを企画する。

「みらい共創Ⅲ」では、2年次までに探究した地域課題等の解決策を地域社会の未来の姿に具体化する取組を主な内容とする。2年次に企画したマイプロジェクトを、自身の卒業後の希望進路を見据えてまとめ上げ、その成果物と検討の過程を成果発表会で披露する。文化祭では、企業等の協力を得て起業の視点による企画実践を行う。学外コンテストへの参加や体験入学等を活用して、学びの成果を広く発信する。また、地元自治体や自治会等と協働したタウンミーティングを開催し、地域課題の解決に繋がる政策提言等を行うなど、これまでの学びの成果を地域社会に還元することを目標とする。あわせて、後輩へのアドバイザーとなる活動を通して、守山北高等学校での地域探究の学びの一層の充実を図っていく。

## 2-1-2 事業の目的等

### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

本県の状況として、県全体の中学校卒業生数は、令和4年度は13,781人とピーク時から33.6%の減少、令和16年度には12,152人と、さらに11.8%の減少が見込まれる。このような人口減少や急速な社会情勢の変化に対応した魅力と活力ある高等学校づくりが必要となっていることから、令和2年度に滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、議論を積み重ね、概ね10から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのための「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」（以下「基本方針」とする。）を、令和4年3月に策定した。

この基本方針では、生徒が社会から学び地域と連携・協働した学校づくり、そして普通科の特色化を進めることとしており、県立全日制高等学校44校中29校を占める普通科について、学際領域に関する学科、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科等の設置を、高校の魅力化・改革の取組の方向性の一つとして示した。そして教育課程や少人数指導の工夫、外部人材の活用を図ることはもちろん、行政機関や地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためのコーディネーターの配置やコンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等の取組が重要であるとした。

さらに令和4年度には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義するとともに、基本方針に基づき、各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン（以下「魅力化プラン」とする。）」を策定した。守山北高等学校についてはスクール・ミッションを、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校としている。また魅力化プランでは、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重点校に位置づけ、特に新学科設置にむけて取組を推進する。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では2040年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の1つとしている。市内には、守山北高等学校のほか、県立中高一貫教育校、私立大学の系列附属高校があり、近隣地域には職業系総合学科高校、農業高校、美術科併置や体育科併置普通科高校、スポーツ強豪校、協働学習の教育課程に特色ある普通科高校と多様な特色ある高校が存在する。その中で守山北高等学校は、学びの特色のない普通科高校の印象が強く、その上公共交通機関の利便性も悪いことが中学生にとって魅力を感じられない高等学校となってしまったところがある。しかし高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、守山市が掲げるアントレプレナーシップとの相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となると考えている。また令和4年度には豊かな自然環境を活用し、次世代を担う環境リーダーの育成やアントレプレナーシップ教育など守山北高等学校の魅力ある学校づくりに向けて、市が連携して取り組みたいとの要望が出され、市から地域連携の強い要請があったところである。

こうした高校教育改革方針、県、守山市の施策など学校を取り巻く状況を踏まえ、地域社会の課題や魅力に着目し実践的な学びを展開し、地域の発展・成長に寄与する人材の育成を図る必要がある、守山北高等学校に「みらい共創科」を設置する。

## **(2) 学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）**

守山北高等学校のスクール・ミッションは、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校である。そのことから、地域社会に関する新学科の名称を「みらい共創科」とし、目指す生徒像を、「多様性を尊重し、他者と協働しながらよりよい地域の未来を創造する人物」とする。

他者と協働しながら課題解決に取り組む方法の実践において、多様性を尊重しながら自他を大切にする姿勢や共感力を身につけることを目指し、またそれらは起業家精神およびキャリア形成に繋がるものであり、予測不可能と言われる社会において、困難を乗り越え、自らの答を見いだしながら未来を切り拓く力を身につけ、主体性やチャレンジ力を備えた地域の未来を創造する人材の育成を目指すものである。

新学科では、地域をフィールドとする協働的な学びを展開することにより、予測困難な社会において、生徒が地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値を創造することができる力を身につけることを目指す。そのために、オンラインにより個に応じた学びを深化させるとともに地域をフィールドとした本物体験で地域課題や地域の未来の姿を探究する取組を展開する。

取組を推進するにあたっては、地域社会に根差したウェルビーイングの視点から、地域課題を探究し地域の未来の姿を構想することを大切にする。守山北高等学校の立地する守山市は「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進しており、ウェルビーイングの視点からの教育活動は、市民一人ひとりの幸せを実現しようとする地元自治体と未来社会を共創することに繋がる。また、ウェルビーイングの考え方は、近江商人が遺した「三方よし」すなわち、自分・相手・社会の幸せという理念とも共通する。誰もが「幸せでありたい」という想いを持つ一方で幸せの在り方は一様ではない中で、人は人と関わり合いながらよき自分、よき相手、よき社会を実現していくと

いう「三方よし」の理念は、幸せの実現へ示唆を与えている。このように、守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や文化的土壌は、新学科の取組の目標を実現するために必要十分なものと言える。加えて、地域に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、NPO等と協働した教育活動（フィールドワーク）を展開することにより、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が生まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への歩みを加速させることにもなる。

さらに、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標とする守山市との連携により、小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することを目標とする。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。これらの取組の推進にあたっては、学びのDXを推進し、本物体験に加えICTを活用した対話的・協働的で深い学びにも挑戦する。現地フィールドワークに加えオンラインを活用した探究活動、Webを通じた探究成果発表等を展開することで、一層幅広い視野から地域課題や地域社会の未来の姿を検証することに繋がることを期待している。また、市内の小中学生や地域住民等に開放する取組を通じた地域の「学びのDXの拠点」となる。

## 2-1-3 実施体制

### (1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

本県教育委員会事務局における実施体制については、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事（校長級）1名、主担当として教育企画主事（教諭級）1名、主任主事1名をその任に充てる。

担当者と校長間で取組状況やコンソーシアムの構築・管理運営について随時情報を共有するとともに、月1回以上は守山北高等学校に出向き、コーディネーター等も交えながら取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行う。また、コーディネーターの活動状況については、毎月活動報告書を高校教育課魅力ある高校づくり推進室へ提出してもらい、業務実態を把握・管理する。あわせて高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動にも立ち会い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーター等と協議を行いながら進め、事業管理を行っていく。

また、県の「魅力化プラン」において地域連携重点校に指定した普通科高校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を定期的を開催することを予定しており、この連絡会議において、各高校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認することとしている。この連絡会議の場で、守山北高等学校からの諸提案を行い、関係各組織に積極的な協働・協力を要請し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、地域連携にかかる課題の共有と成果の普及を行っていく。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は隔年開催（令和5年度の連絡会議は、令和6年1月23日に開催）とし、本県の地域連携重点校について、守山北高等学校からの提案等により、諸課題等の情報共有を行うとともに、他の高等学校の進捗状況を確認しながら、守山北高等学校の改善点等を把握することとしている。働き方改革の観点から、オンラインによる開催も積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は滋賀県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室長を事務局長に据え、参事（校長級）および業務を専

属で担当する教育企画主事（教諭級）、指導主事を配置する。

この「地域連携重点魅力化連絡会議」に加え、守山北高等学校については、年3回、運営指導委員会を開催することで、コンソーシアムの構築や管理運営を含めた事業の進捗状況や成果について、その都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。運営指導委員会は外部有識者で構成するものとし、事業の目的に鑑み、以下の構成で委員委嘱を行う。

- ・委員 学識経験者（兵庫教育大学学校教育学部教授）  
：評価や学校経営、改革について指導
- ・委員 学識経験者（立命館大学産業社会学部教授）  
：学校と地域との連携、探究学習について指導
- ・委員 守山市長：地元行政の立場から、地域連携・地域人材育成について指導
- ・委員 民間企業（株式会社日本政策金融公庫 大津支店支店長）  
：高校生ビジネスプラン・グランプリを主催しており、アントレプレナーシップの育成について指導・助言
- ・委員 民間企業（NPO法人碧いびわ湖）：環境教育の専門家として指導

運営指導委員会は、県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室参事（校長級）が事務局長となり、業務を専属で担当する教育企画主事（教諭級）、主任主事をその任に充てる。

## （2）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、管理機関では、令和4年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この事業において、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネーター人材の必要性がより確かになってきたところである。

コーディネーター人材に期待する、評価する考え方は3点ある。1点目として、高校から地域に働きかけるコーディネーター機能として、生徒を指導するというより、授業において地域との関わり、機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介したりするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを求めたい。2点目は、県立学校が位置する地域におけるコーディネーター機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を求める。高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することも期待する。3点目としては、地域連携の流れを持続可能なものにするため、属人的な活動で終わらせるのではなく、協働体制（コンソーシアム）を構築・充実させ、事業指定終了後も持続可能な協働体制構築のコーディネーター機能を期待する。その評価は、校長との面談を含めたコーディネーター人材の自己評価、コーディネーター人材も企画にかかわる学校設定教科の実施に向けた試行的な各種授業・行事での生徒アンケートの結果や、運営指導委員による事業内容全体を含めた教育課程の検証、事業の進捗状況等にかかわり評価を行う。また事業全体としても、年2回実施の学校評価（自己評価や学校関係者評価）において行い、複数の視点で評価していく。

令和4年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高校29校のうち、地域連携重点により魅力化を図ることを推進する13校で「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和5年度から開催する。その中で、守山北高等学校による地域社会に関する学科の設置に向けた具体的な提案を期待するほか、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果・検証を行う。併せて守山北高等学校では、年3回、運営指導委員会を開催し、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てることとしている。

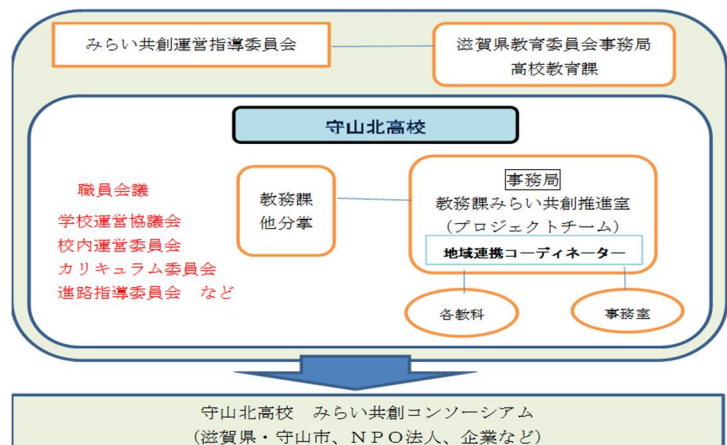
さらに、管理機関は、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook やLINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業のその後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を4年後・7年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究し評価も行う。集計・分析した調査結果は、国の事業終了後も、守山北高等学校や県教育委員会において、本事業の成果の検証および「魅力化プラン」の地域連携重点の事業成果のための基礎資料として役立てることとしている。

また、スクール・ミッション、スクール・ポリシーの観点からも事業全体を成果検証し、評価していく。特に、高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、行政機関の施策への反映やコンソーシアムや報告会でのコメント等で社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としての観点で評価したい。さらに、県教育委員会で実施する中学校等卒業予定者進路志望調査の結果も注視し、守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力、成果について、守山市教育委員会とも協力し分析・検証していくこととしている。

### （3）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

校長は、校務分掌の1つとして、教務課内にみらい共創推進室を設置する。プロジェクトリーダー（専任）および担当教員（教務課兼務）、コーディネーターを配置、協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築の原案作成にあたり、みらい共創科設置の事務局となる。カリキュラムに関すること、進路指導に関すること、学校全体の教育活動に関すること等、内容と必要に応じて、カリキュラム委員会、進路指導委員会、校内運営委員会などの協議を行い、最終的には職員会議で全体報告をして取組を進めている。

校長と教頭は、みらい共創推進室との定期的な会議を実施し、事業全体の企画立案や、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討状況、地域の各種主体と連携した授業や活動などの企画について報告を受け、事業全体を管理していく。またMicrosoft Teams を活用することで、管理職・教員・コーディネーターの日頃のやり取りを可視化し、お互いの状況把握が常時可能な状況をつくる。



みらい共創推進室を中心に、育成する資質・能力を、職員会議の中で学校全体として明確・共有化を図りながら、学校運営協議会やコンソーシアム等を通じて地域とも共有化を図り、カリキュラム開発を計画していく。そして担当教員・コーディネーターが連絡・調整を図りながらカリキュラム全体の有機的なつながりを意識した教育実践を展開する。その実践に対し、生徒の活動への総体的な評価活動、地域住民やコンソーシアムへの意識・評価に関する調査（アンケート）を実施する。その評価活動や調査結果を年3回の運営指導委員会や、コンソーシアム代表者会議、職員会議に諮り、みらい共創推進室を中心に、全教員で生徒と地域の実態を踏まえた教育実践として改善・充実を図る協議を行うことで、PDCAサイクルを展開していく。そのうえで取組の成果を管理機関が行う「地域連携重点魅力化連絡会議」において、守山北高等学校からの提案等

を行い、地域連携に対する諸課題等の情報共有を行うとともに、守山北高等学校の改善点等に関する助言も得たいと考えている。

令和7年度は、学校と地域の関係構築・事業推進を大事にしながら本事業に関するコンソーシアムにより、各主体との調整やその運営を実施していく。

また、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者と校長で取組状況を共有するとともに、月1回以上は、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行うほか、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行う。

#### **(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）**

地域社会学科に関わる研究開発の実績としては、令和3年度からマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を彦根工業高校において実施している。彦根工業高等学校は、「ものづくりはひとつづくり」をモットーとした創立100年以上の歴史ある学校である。高校がある彦根市には高等教育機関として、滋賀県立大学工学部・環境科学部や滋賀大学データサイエンス学部等がある。伝統技術等のビッグデータ分析などICT・デジタル教育で連携を図りながら、社会的課題を新たなチャンスにとらえ、高付加価値を持つ産業へと創出できる“人財”を多様な主体の共創により育成するシステムを構想し、研究推進に取り組んでいる。

絶えず革新し続ける最先端技術と滋賀の風土が培ってきた伝統産業等の技と心を生かし、地域産業界と彦根工業高校が一体・同期化し、郷土愛にあふれた人財育成によって地域を活性化させ、地域産業の未来像の実現を資するものである。

また、令和元年から実施された文部科学省事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に3校が申請を行ったところ、令和元年度からグローバル型アソシエイト校に高島高等学校、令和2年度からプロフェッショナル型アソシエイト校に大津高等学校が認定された。

高島高等学校は、地域の特性に応じながら同時にグローバルな視点ももって社会課題の研究を行う、フィールドワークを含む「高島学」での探究的な学びを実施している。また大津高等学校は地域の課題を家庭科の視点から捉え、地域と連携・協働しながら、地域理解を深化させ、職業観を醸成しながら、地域をどのように活性化し、地域に貢献していくべきかに取り組んでいる。両校の事業指定は終了したが研究成果をいかし、地域連携を推進する取組を継続していくとともに、県内高等学校へも情報発信を行う。

さらに、滋賀県独自の研究指定事業として、3つの研究事業を実施している。

「県立高等学校魅力化推進事業」では、モデル校に地域連携のためのコーディネーターを配置し、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICTによる学校間連携授業に取り組んだ。

「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」では、研究推進校に守山北高等学校を指定し、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実に取り組んだ。

「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」では、守山北高等学校をはじめ、17校を指定して、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

本県では、県立高等学校と地域社会との連携は重要であるととらえ、守山北高等学校をはじめ

複数の学校に対し、県独自の地域連携事業をはじめ、学校運営協議会設置を推進し、コミュニティ・スクールを拡大してきた。現在、守山北高等学校はコミュニティ・スクールとして地域連携を深めているが、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受けることにより、学校と地域の関係性をさらに深め、学校と地域の連携・協働による教育活動の推進の先導性を高めることで、本県高校教育の更なる充実を図りたい。

### (5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
滋賀大学教育学部 教授	大野 裕己	評価、学校経営、改革の視点で指導助言
立命館大学産業社会学部 教授	柏木 智子	学校と地域との連携、探究学習について指導助言
守山市 市長	森中 高史	市長。行政のトップとして、地域連携、地域人材育成を指導助言
株式会社日本政策金融公庫 大津支店長	桶土井 雅章	大津支店長。企業家精神、ビジネスプランについて指導助言
NPO法人碧いびわ湖 常務理事	根木山 恒平	滋賀県の環境教育を推進する専門家として指導助言

### (6) 運営指導委員会が取り組む内容

運営指導委員会には県教育委員会から参事・教育企画主事・主任主事も入り、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価を行う。新学科の目的である、地域を通して学び、将来社会人として地域や社会で活躍・貢献できる力を伸ばす教育について、教育課程の検証、事業の進捗状況等について指導助言を行う。また地域や関係機関のコンソーシアムに働きかけ、学校とコンソーシアムを有機的につなげる役割や、さらに高校教員やコンソーシアムの参加主体に向けた、新学科の理解向上に向けた研修を推進することで、高校と地域のスムーズな連携実現を目指す。

## 2-1-4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

琵琶湖に近い立地、豊かな自然環境や歴史環境等の地域資源を活かした本物体験による地域をフィールドとした探究的な学びと、小中高の連携によるキャリア形成や行政・地元企業等と連携したインターンシップ、地域人材の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育（地域人材の育成）を新学科における教育内容の柱とし、学びの方法・手法として、学びのDXを推進し、新しい学びの姿を構築する。1人1台端末を活用する各教科の学習では、個別最適な学びを実現するための補足的・発展的な学習等の学習活動や情報モラルに関する学習に取り組み、またICT機器等を活用した観察・実験・実習の機会を増やす。

また、探究学習の推進にあたっては、大学や企業等の協力を得ながら、生徒自身が、ICTを活用した調査研究に取り組める環境の整備を進め、本物体験とオンラインによる対話的・協働的で深い学びの実現を目指す。例えば、対面では都合がつかない講師とも、一斉的な全体講義だけでなく、グループによるディスカッションを行い、探究の視点の広がりや深まりを期待する。また対面においても、オンラインにおいても、講師には1回の講義ではなく、複数回にまたがる指導も考えている。講師が社会人であれば生徒に対面で指導する時間をとりにくい状況も考えられ、

オンラインを有効に活用したいと考えている。さらに教科学習以外でも、オンラインの活用により、芸術やスポーツの専門性のある教員や生徒が地域の中学校等とともに活動したり、地域や大学等の専門家による指導を受けたりする活動を展開する。この活動は、生徒や地域住民で創り上げるスポーツ・文化活動への発展が期待でき、地域との協働活動の展開や地域の活性化に繋がるものとなる。

教育内容の中心となる地域課題とその解決策を探究する学習は、ウェルビーイングの視点から、地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値の創造に繋がるものとなるように取組を推進する。全校的な「総合的な探究の時間」では、守山市を中心とした地域理解と地域・社会課題の解決に向けた探究活動等に取り組み、キャリア形成と地域社会への当事者意識の醸成を目指す。また、学校設定教科「みらい共創」においては、各学年に系統的に学校設定科目を配置し、「総合的な探究の時間」との相乗効果で探究学習が展開できるように配慮する。具体的な学校設定科目としては、1年次に「共創」の基礎理解やソーシャルスキル、グラフィックレコーディング・プレゼンテーション等のスキルの習得をねらいとする「みらい共創Ⅰ（2単位）」、2年次にインターンシップを軸とした地域や企業等との連携プロジェクトを展開する「みらい共創Ⅱ（3単位）」、3年次にはウェルビーイングの視点をもとに、2年次までに探究した地域課題等の解決策を地域社会の未来の姿に具体化する「みらい共創Ⅲ（2単位）」を設定する。各科目における教育内容やそのねらい、評価等については、大学講師のカリキュラム・アドバイザーや革新的な教育活動講師の指導・助言も受けながら研究を進めていく。「みらい共創Ⅰ」「みらい共創Ⅱ」の中で、コンソーシアムの関係団体には、生徒の探究学習の進め方や課題の設定、具体的なフィールドワーク等での指導で協力をいただくことを、「みらい共創Ⅲ」では、コンソーシアム関係者や地域住民、中学生等と地域の未来像などについて懇談を行い、生徒の提案についての評価にかかわっていただくことを想定している。

ウェルビーイングの視点からの探究学習は、一人ひとりの幸せを実現しようと「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進する守山市の構想とも一致し、守山市との協働関係を一層深めることで、学校と地域との未来共創に繋がり、まちづくりにも寄与する取組となる。さらに、一人ひとりの幸せを大切にするウェルビーイングの視点は、生徒が、フィールドワークやオンラインによる他者との関わりを通じて、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢を育むことに繋がり、インクルーシブな社会の姿を地域の人々と共有し、学校と地域の未来共創に発展する取組となる。

## （2）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

令和6年11月に守山北高等学校魅力化コンソーシアム第1回準備会議を、令和7年1月に第2回準備会議を開催し、設置目的、運営体制、規約等について議論いただき、新学科実施推進体制について了承を得られた。また、令和7年2月の学校運営協議会、同年3月のみらい共創科運営指導委員会で報告し、令和7年4月に設立委員会ならびに第1回理事会を開催する予定である。

コンソーシアムは活動方針を共有・協議する理事会と具体的な活動を行う分科会の2層構造とし、守山北高等学校みらい共創推進室が中心となりコンソーシアムとやり取りを行う。コンソーシアム構成員は、地域に根差したウェルビーイングの観点から、びわこ成蹊スポーツ大学をはじめとする大学や福祉施設・市役所関連部署等を、アントレプレナーシップ・キャリア教育として、商工関係団体・市内関連事業者等を迎え入れる。特に「みらい共創Ⅱ」や「みらい共創Ⅲ」の科目において、インターンシップ、高大連携、地域連携を実施するうえで、各活動の企画、実施、総括に関し、分科会に加わっていただく大学、企業、行政機関等と学校が双方向の協議をしながら、学びの充実を図る予定である。

本事業におけるコーディネーターは、まずは高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、授業において地域との関わりや機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介した

りするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを進める。そのうえで学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を発揮し、高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することを期待する。さらに地域連携の流れを持続可能なものにする学校と有機的につながった協働体制（コンソーシアム）を構築していく。

地域や社会の将来を担う人材の育成として、行政機関、地域住民、産業界、大学等と連携・協働したフィールドワークによる調査研究や企業コラボ学習、インターンシップなどによる地域課題解決にむけた学習を推進するコンソーシアムとする。学校運営協議会や総合的な探究の時間における生徒フィールドワークの協力者から、さらに生徒の課題研究テーマに応じて、新規開拓も行う。結果として高校を核とした有機的なつながりとすることで、地域活性の一端を担うことを視野に入れる。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたいことから、コンソーシアムの構成員、特に分科会の構成員から高校生の取組に対する社会的評価も期待している。

### （３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
守山市総合政策部企画政策課	調整中	課長 まちづくり推進
守山市教育委員会学校教育課	調整中	小中高連携によるキャリア教育推進
守山市商工会議所	調整中	1300 件超の参加事業所からの実例
守山青年会議所	調整中	若手実業家と未来を共創
びわこ成蹊スポーツ大学	調整中	総合型地域スポーツクラブの研究
滋賀県教育委員会	調整中	県立高等学校の魅力化に関すること
守山北高等学校 P T A	調整中	守山北高等学校保護者との連携
守山北高等学校		事務局

上記は、「理事会」の構成員であり、他に「新学科運営分科会」「インターンシップ運営分科会」「高大連携分科会」「地域連携分科会」を組織し、大学、企業や NPO 法人、地元自治会等に参加いただく。

### （４）配置するコーディネーターの属性や役割

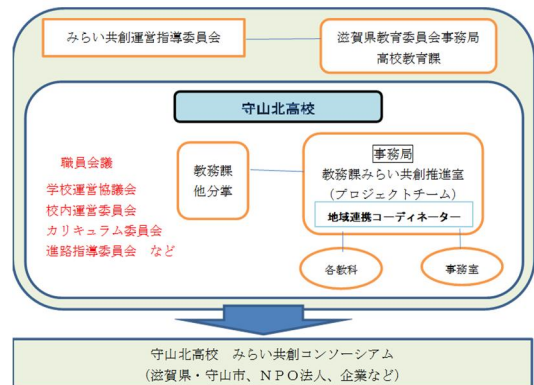
所属	氏名
インパクトラボ	上田 隼也（代表理事）
成安造形大学 未来社会デザイン共創機構	田口 真太郎（助教）

#### ▼当該者の主な実績

上田氏は、立命館大学生命科学部卒業後、2019 年一般社団法人インパクトラボを創業。学校法人立命館で、SDGs 推進本部イノベーション・オーガナイザーとして、社会起業家支援プラットフォーム立ち上げに参画。さらに、立命館守山中学校・高等学校にて総合的な探究の時間の授業を担当。田口氏は、滋賀県立大学大学院環境科学研究科修了後、近江八幡市の(株)まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事。文化的景観や伝建地区、無形文化財の活用を統括。2015 年からは地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援に取り組み、高校生や大学生の地域探究学習をサポート。

### ▼コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

2人のコーディネーターであわせて月8日、守山北高等学校で勤務し、教務課内に設置するみらい共創推進室に所属し、プロジェクトリーダーおよび担当教員と協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築にあたる。上田氏の学校法人で社会起業家支援に参画、総合的な探究の時間の授業を担当した実績から、教育や起業について、田口氏の近江八幡市の㈱まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事、地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援の取組で高校生や大学生の地域探究学習をサポートした実績から、行政やまちづくり視点での活動を期待している。両者の強みを生かして、高校教育、アントレプレナーシップ、地域共創という新学科の目標を達成したい。



また、コーディネーターは、県教育委員会高校教育課魅力ある高校づくり推進室や守山北高校プロジェクトリーダーと協働し、主に事業全体の企画立案やコーディネートを行う。

担当教員と連携しながら、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討に関連して、地域の各種主体と連携した授業や活動等を企画・実施する。本事業にかかわる行政や民間事業者、地域組織など多様な主体との調整や事業促進を、対面や電話、オンラインでのやり取りで行う。また、実施事業を学校ウェブサイトやSNSなどを活用した情報発信を行い、学校と地域の関係構築も行う。高校と地域住民の接点を作り、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進する役割も担う。

### (5) 学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

県教育委員会では、急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者から成る滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、令和2年度から2年間にわたって議論を積み重ねてきた。そこで出された答申は、令和3年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和4年3月「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」として策定、公表した。

令和4年8月には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、守山北高等学校については、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校とし、生徒、保護者にも公表した。

令和4年11月には、「魅力化プラン」策定に際し、市町のまちづくり主管課、教育委員会、地域の中学校長、保護者とそれぞれの代表に出席いただき、滋賀の県立高等学校の魅力化の方向性についての意見聴取（地域別協議会）を実施した。その中の意見を受けて、令和5年3月には「魅力化プラン」を提示した。守山北高等学校については、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重点校として、新学科設置による魅力化を推進することを示した。

守山北高等学校はコミュニティ・スクールであり、学校運営協議会の中でも、高等学校の魅力化やスクール・ポリシーについて検討する中で、地域や学識経験者・保護者に説明し、それぞれの目線で意見をいただくことができた。

今後も管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、毎月発行する保護者向

け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用するとともに、全県下の中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うなど、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。

また、守山北高等学校では令和7年度PTA総会やPTA新聞、学校通信等の機会を捉え新学科設置に向けた情報発信や、実施事業を学校ウェブサイトやSNS等を活用した情報発信を行い、守山市が高校生を対象に実施する「守山市の将来を支える若い世代の起業家教育推進事業」にも参加し、他の守山市内の高校生とも議論を重ね、その成果発表を行うことで、守山北高等学校の生徒・保護者・地域等へ新学科設置の周知に努め、高校の所在地の守山市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌「リビング滋賀」に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたい。年度末には、研究成果報告会（守山市、市内中学校・高校、コンソーシアム関係者等）を実施する予定である。

令和7年度には、全県下の中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うとともに、守山市を中心に、地域連携の取組、学校改革についての説明会を、地元小中学校等を基本とした形で実施し、生徒・保護者・地域に対する説明を行う。また学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信をしていく。

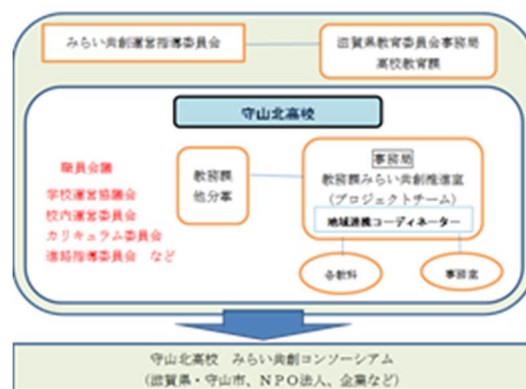
## 2-1-5 実施計画

### (1) 3ヶ年の実施計画の概要

令和5年度の校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課みらい共創推進室（プロジェクトチーム）を組織した。そのうえで、委嘱した運営指導委員、校長、教頭、事務長、教務主任を中心に研究にかかわる組織ならびに運営指導委員会、コンソーシアムを、右記の通り構成する。

管理機関の担当者と校長は、月1回以上は取組状況を共有しながら、諸課題の解決に向けた定期的協議を行う。また生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動を複数回見学し、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行い、学校設定科目「みらい共創Ⅰ」「みらい共創Ⅱ」「みらい共創Ⅲ」のシラバスの充実を図る。例えば、「食・健康」をテーマに課題設定したグループでは、「学校給食と地域特産物」「食物アレルギー」「子ども食堂と現代社会」や、「ピワイチ、わたSHIGA輝く国スポ・障スポという本県施策と地域」や「健康とは何か」という研究主題を、フィールドワークも踏まえながら、ウェルビーイングの視点をもって研究し、そこから見える地域のみらいを考えたい。校内事務局では、地域連携コーディネーターと協働して、学校設定教科・科目の内容と育成したい資質・能力の関係について、運営指導委員会での評価・検討も受けながら、改善を重ねていきたい。

管理機関においては、「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第5号）」改正を行い、新学科設置を正式決定した。また「地域連携魅力化重点会議」「運営指導委員会」を開催し、課題の整理や他校への情報発信、連携促進に努める。令和6年度は、新学科設置の周知活動として、県教育委員会ホームページはもちろん、毎月発行する保護者向け情報誌「教育しが」や、「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行う。また6月には県教育委員会が主催し、8月には高等学校が主体となり学校説明会を実施する。並行して、地域連携コーディネーターと協働して学校設



定科目について、普通科生徒の教育課程を一部変更するなど、指導と評価を一体的に行い、教育課程について、総合的な探究の時間を含めカリキュラムマネジメントを図り、改善を図るとともに、コンソーシアム構築の充実を図る。卒業生には、「地域における課題に関わりたいと思うか」、「社会課題について、家族や友人など回りの人と積極的に議論しているか」等のアンケートを実施し、新学科1期生との比較データとしていきたい。

令和7年度入学生が1期生となる。地域連携コーディネーターと協働して練り上げた学校設定科目や総合的な探究の時間、その他各教科の教育活動等をマネジメントしながら実施し、生徒アンケートや関係者の評価を受けながらカリキュラムについてさらに改善したり、構築したコンソーシアムの充実化を図ったりしながら、指定事業終了後の体制づくりについても、守山市やコンソーシアムの関係団体等と確認を行う。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、コンソーシアムの構成メンバーを再検討したり、学校運営協議会組織とも関連付けたりしながら、より実効性のある活動ができる組織としていく。

## (2) 令和5年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校設定教科「みらい共創Ⅰ」実施（探究基礎（外部講師の講演会、グループワーク等）（革新的な外部講師1人）</li> <li>・「総合的な探究の時間」実施（校長講話、グループ内発表など）</li> <li>・「みらい共創Ⅱ」インターンシップ等実施計画の詳細検討（アドバイザーによる助言等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム」（以下、コンソーシアム）第1回理事会</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（k j法等）</li> <li>・「みらい共創Ⅱ」インターンシップと高大連携の詳細検討➡運営分科会提案</li> <li>・「総合的な探究の時間」（劇団員によるロールプレイング講演会（革新的な外部講師3人））</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンソーシアム第1回インターンシップ運営分科会、第1回高大連携運営分科会</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（革新的な外部講師によるグラフィックレコーディング基礎講座（1人3回）、革新的な外部講師によるSDGs（MLGs）講演（1人））</li> <li>・「総合的な探究の時間」（コ・クリエーション（共創）を考えるグループワーク等）</li> <li>・「みらい共創Ⅱ」のモデル授業実施計画の検討、生徒への周知（アドバイザーによる助言等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回運営指導委員会</li> <li>・コンソーシアム第1回新学科運営分科会、</li> <li>・学校説明会（県教育委員会主管）</li> <li>・学校運営協議会・コンソーシアム第1回地域連携分科会</li> </ul>

7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学科内中間発表（外部講師の助言）</li> <li>・「みらい共創Ⅱ」インターンシップ、高大連携等のモデル授業準備・実施</li> <li>・「みらい共創Ⅰ」「総合的な探究の時間」の教育内容の中間評価・確認および生徒評価方法の協議（アドバイザーによる助言等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携防災訓練の関係者協議（学校・障害者施設・高齢者施設）</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅱ」インターンシップ、高大連携等モデル授業の実施（生徒派遣）と振り返り</li> <li>・個に応じたICT活用の研究</li> <li>・起業家精神教育事業実施（講師2人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オープンスクール（中学生や保護者に新学科説明）</li> <li>・守山市実施の地域事業への参加（アントレプレナー講座、市民ミーティング、野洲川いかだ下り体験）</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（企画提案型の地域研究の実施（革新的な外部講師（3人）との協議やフィールドワーク、外部講師等と課題解決策の検討））（アドバイザーによる助言等）</li> <li>・「総合的な探究の時間」（文献調査活動や要約）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域中学校との連携（教員向け）（新学科説明等）</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（企画提案型の地域研究の実施（課題解決策の検討・発表準備））</li> <li>・個に応じたICT活用の研究</li> <li>・みらい共創Ⅱのインターンシップ等の課題の検討と整理、改善策のまとめ（アドバイザーによる助言等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンソーシアム第2回インターンシップ運営分科会、第二回高大連携運営分科会（みらい共創Ⅱのモデル授業の評価と次年度協力依頼）</li> <li>学校運営協議会・コンソーシアム第2回地域連携分科会</li> <li>・地域連携防災訓練の実施</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（課題解決策発表会実施と外部有識者による評価・講評）（革新的な講師3人）</li> <li>・「総合的な探究の時間」（革新的な講師による講演1人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回運営指導委員会</li> <li>・コンソーシアム第2回新学科運営分科会、</li> <li>・オープンスクール（中学生や保護者に新学科説明）</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な探究の時間（地域で活躍する人との交流から生き方・地域を考えるフィールドワーク（12か所））（アドバイザーによる指導助言等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域中学校との連携（教員向け）</li> <li>・地域連携防災訓練振り返り</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「みらい共創Ⅰ」（社会課題解決策の実行・検証・考察、成果発表会に向けた準備。生徒の学習評価と次年度の改善点等検討）アドバイザーによる助言等</li> <li>・「総合的な探究の時間」（フィールドワークの報告書、成果発表会への準備）・講師による発表方法等に関わる講義</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携重点魅力化連絡会議（県教育委員会主管）</li> </ul>

2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個に応じたICT活用の検証</li> <li>・「総合的な探究の時間」（クラス発表会の実施、生徒の学習評価の実施と年間教育内容の振り返り、改善策検討） (アドバイザーによる助言等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営協議会</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もりきたフォーラム（研究成果発表会）実施（外部講師による講演や指導助言等） (アドバイザーによる助言等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もりきたフォーラム（研究成果発表会）（守山市、市内中学・高校、コンソーシアム関係機関等）</li> <li>・第3回運営指導委員会（事業報告会）</li> <li>・コンソーシアム第2回理事会</li> </ul>

### （3）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

管理機関による「地域連携重点魅力化連絡会議」を隔年開催する。ただし令和5年度については令和6年1月23日に開催した。働き方改革の観点から、オンラインによる開催を積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。その際に守山北高等学校から事業の進捗状況や成果と課題について報告を行い、他の地域連携に取り組む県内高等学校への情報提供とともに評価も行う。

守山北高等学校において、年3回（おおよそ6月、11月、3月）、運営指導委員会を実施していく中で、本構想において実現する成果目標の設定を行う。現時点においては就職希望者のうち県内に就職する生徒の割合を95%以上とすることや、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合80%以上とすること、生徒アンケートにおいて「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」を80%以上、「地元で貢献したいと思う生徒の割合」80%以上、「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85%以上とすることなどを想定している。

また、公益財団法人日本財団「18歳意識調査第46回国や社会に対する意識」（令和4年度）によると、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」とする肯定的回答は30.1%、「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」は34.2%となっており、生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識の向上は喫緊の課題であり、事業を実施することにより、いずれも60%以上とすることも想定している。

守山北高等学校は、地域連携を重点として高校の魅力化を推進し、地域で活躍する人材を育成する高校として、生徒が地域に赴き、地域の人々と協働して何かに取り組む回数や地域の方々や卒業生を学校に招く回数をあわせて年間20回を目指し、地域に開かれた学校づくりを推進する。また自治体に対する政策等の提案を年間3回、市内の高等学校による合同発表会や研究報告会等への参加回数を最終年次は6回としたい。

管理機関としては、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook やLINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を4年後・7年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究する。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、

コンソーシアムの構成メンバーを適時再調整しながら、学校運営協議会組織とも関連付け、より実効性のある活動ができる組織としていく。

### 2-1-6 成果の普及のための仕組み

管理機関では、令和4年度から県予算の「県立高等学校魅力化推進事業」を実施し、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置において、コーディネート人材の必要性が見えてきたところである。守山北高等学校において開催する年3回の運営指導委員会を通じた研究の深まりにより、「魅力化プラン」の中で、地域連携重点による魅力化推進を指定した普通科13校による「地域連携重点魅力化連絡会議」の中で、地域社会に関する学科の設置推進に向けた具体的な提案により、地域連携の課題研究と解決の方向性の提案、さらに他校の小学科検討推進を期待している。

また、生涯学習課が主管する「県立学校コミュニティ・スクール推進事業研修会」における事例発表を行うことにより、コミュニティ・スクールの円滑かつ効果的な導入や取組の充実が図られ、県立学校の地域連携・協働の推進につなげたい。

さらに、令和5年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。この「学びの祭典」において、アントレプレナーシップに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科設置を県内の中学生等にアピールしていく。

あわせて、県ホームページへの掲載や、県内全ての小中学生と保護者に配布される情報誌「教育しが」で取組を紹介し、広く成果を発信するほか、守山北高等学校では、オープンスクールを年3回実施するとともに、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信する。また守山市の公報や学校独自の広報誌（学校通信）を発行するなど、地域住民や地元中学校等に向け情報発信を行っていく。

### 2-1-7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

#### ① 管理機関

・国の指定終了後も、「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、管理機関である県教育委員会は守山市と事業指定3年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。

・県教育委員会事務局生涯学習課の令和6～8年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。

・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施している。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6～8年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。この事業のように、「みらい共創科」の学びの継続・充実のための予算確保や、守山市や地

域の企業等から費用を含めた支援も含め検討していく。

・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した、「魅力化プラン」の事業成果の検証を行うとともに、教育委員会内の体制整備を行い、また必要な予算を獲得し、守山北高等学校が、県予算で自走していけるよう必要な支援、コンソーシアムの継続を行う。

② 守山北高等学校・守山市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、守山市全体でも、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

## 2-2 事業の実施日程（事業結果説明書より）

事業項目	実施日程（令和7年4月1日～令和8年3月31日）												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
<b>カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施</b>													
外部講師による講座		●					●		●			●	
フィールドワーク	●	●				●			●				
実践型インターンシップ				●	●								
企画提案型アントレプレナーシップ演習						●	●	●	●	●			
<b>関係機関との連携協力体制の構築・維持</b>													
運営指導委員会				●					●			●	
学校運営協議会			●				●				●		
コンソーシアム会議（分科会含む）	●		●				●				●		
先進校視察										●			
経済産業協会加入企業との意見交換会								●					
関係機関へのヒアリング			●	●	●				●	●	●	●	
<b>コーディネーター</b>													
コーディネーター（上田氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
コーディネーター（田口氏）	●	●		●			●	●	●	●	●	●	
<b>新学科説明会等の実施</b>													
体験入学の実施					●			●					
地域中学校への訪問			●				●						
新学科説明会			●										
<b>成果発表・成果普及</b>													
「滋賀県立高等学校魅力化プラン」に基づく取組状況調査・結果共有												●	
公開授業			●				●	●	●		●	●	
学びの祭典									●				
みらいフォーラム（成果報告会）										●	●		
<b>成果検証</b>													
定量評価の実施（Ai-GROW）		●							●			●	
体験入学の際の中学生・保護者アンケート					●			●					
中学校等卒業予定者の進路志望調査						●				●			

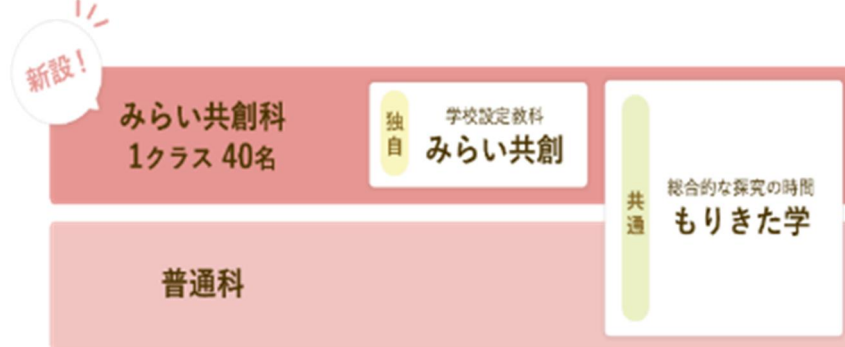
## 2-3 事業の実施概要

### (1) カリキュラムの検討内容

#### みらい共創科 設置初年度

本校では、滋賀県が進める学科改編、普通科改革の一環として、本年度から新学科「みらい共創科」(地域社会学科)が1クラス設置された。“地域を教室に、自分のやりたい!を見つける、試す、深める”をコンセプトに、様々なつながりから自己形成を図れる学科を目指している。一方で、新学科の設置及びその推進に向けた取組だけが学校全体の特色化、魅力化にはならないという考えのもと、新学科のカリキュラム編成と並行して、「総合的な探究の時間」や進路支援のプログラムについても検討、試行を繰り返してきた。以下、その実際の取組の様子、成果や課題についてまとめていく。

▽学科改編後 (R7 年度～)



#### 本校のキャリア教育推進体制の構築・実践

新学科「みらい共創科」での学びが単発的な取組にならないよう、総合的な探究の時間「もりきた学」、進路支援「キャリアデザイン」を系統立てて取り組めるよう、カリキュラムマネジメントを行った。下図は3年間の展開図である。

▽3年間の展開図

#### 探究活動と進路支援 (3年間の展開)

プログラム	1年次(キャリア導入期) 「多くの選択肢から自己目標をデザイン」	2年次(キャリア準備期) 「自己目標実現に向けた学びの実践」	3年次(キャリア履修期) 「学びをまとめキャリア形成へ」
もりきた学	テーマ:「人と会う」 ～基礎的なソーシャルスキルの獲得～ ・人を想う心(コミュニケーション基礎) ・文献調査 ・フィールドワーク「住人叶色」 ・成果発表会「もりきたフォーラム」	テーマ:「地域と会う」 ～探究学習の実践と進路意識の醸成～ ・自己分析・学部学科/業種研究 ・地域課題探究「モリキタOODA」 ・成果発表会「もりきたフォーラム」	テーマ:「道と会う」 ～独自研究プロジェクトによる学びのまとめ～ ・志望理由書/自己PR文 ・個人探究「卒業レポート」 ・個人探究「研究集録完成」
みらい共創 地域連携・ プロジェクト型学習	「共創」の基礎理解と技術習得 ～多様な人との共創に必要な探究スキルの習得～ ・探究基礎(ブレインストーミング) ・探究表現(グラフィックレコーディング) ・企画提案型アントレプレナー演習(地域課題テキスト) ・コンペ大会・プロジェクト実施(地域探究・ボランティア活動)	「共創」の実践-地域連携プロジェクト ～地域と協働したインターン・マイプロジェクト～ ・地域探究プロジェクト開始 ・アントレ活動(地域インターンシップ) ・マイプロジェクト1(実践型プロジェクト学習)	「共創」の発信・還元-社会実装プロジェクト ～学びの成果を地域や社会に還元する～ ・社会実装プロジェクト(地域への発信) ・学校魅力化プロジェクト ・成果報告会・後援アドバイザー
キャリアデザイン プログラム 進路支援	キャリア意識の形成 ～基礎的なソーシャルスキルの獲得～ ・文理選択ガイダンス ・進路学習講座(適性検査) ・職業講演会 ・進学補習開始 ・公務員試験勉強会開始	進路選択・職業体験の実施 ～探究学習の実践と進路意識の醸成～ ・進路ガイダンス(大学・専門学校・企業説明会) ・職業体験・インターンシップ(企業・自治体・医療福祉) ・職場見学・実践型インターンシップ ・進路別説明会(保護者向け含む) ・公務員試験勉強会	進路実現(受験・就職試験対策) ～独自研究プロジェクトによる学びのまとめ～ ・受験対策(模試・小論文・進学補習) ・就職試験対策(面接指導・公務員試験勉強会) ・進路別ガイダンス(進学・就職) ・最終面接指導・進学先オリエンテーション

<学校設定教科（本年度スタート）>

(i) 「みらい共創」（学校設定教科）

■学校設定科目「みらい共創Ⅰ」（1年：2単位）

【テーマ】 “ 「共創」の基礎理解と技術習得”

【教科目標】

- ・多様な人たちとの共創に必要な探究スキルの習得  
(地域課題の発見・設定方法、円滑なグループワークを行う協働力、それらを表現するプレゼンテーション力)
- ・地域の課題に取り組むアントレプレナーシップ（起業家精神教育）の基礎理解と実践
- ・探究学習を通じて、ウェルビーイングの基礎理解と実践

【学習内容】

①「探究基礎」

→ 探究に関する講演会や導入授業、現場実習を実施し、ブレインストーミングなどのグループワーク（発表や振り返り含む）を繰り返し、探究的な学びを進めていく上での基礎的な知識やスキルを習得し、「共創」に関する基礎理解を深める。

②「企画提案型アントレプレナーシップ演習」

→ 外部講師による特別講義と現地研修（フィールドワーク）から探究する地域課題の設定を行い、予備調査を経てコンペ大会（仮説の提案）を実施する。その後グループに分かれて仮説の実証を行い、最後に振り返りを行う。

③「みらいフォーラム」

→ 学科内で学年を縦断した成果報告会を実施する。今年度は1年生のみ。

④「みらいノートの作成」

→ グループでの振り返り、自己評価、他者評価、個人レポートの作成、アンケートの実施等を行った後、2年次コース選択（アドバンスコース・キャリアコース）や次年度のプロジェクト計画書の作成を行う。

【実際の授業の様子】

(i) - ①「探究基礎」

「共創講演会」

4 / 1 8（金）5限：共創講演会 講師：成安造形大学 田口先生（本校 CN）

目的：「共に創る」ことの意義、現場実習の意義・ポイント・姿勢について学ぶ

内容：「もしもカード」ゲーム／教室フィールドワーク



▽生徒感想

- ・フィールドワークでは正解を見つけるのではなく、anything(なにか)を発見することだとわかった。そのために五感を使ったり、気づきを集めることが大事だと思った。
- ・話し合いを積極的に行うことで、様々な意見や考えをひろうことができるんだと思った。
- ・他の教科だとほぼ正解があって、正解のない課題に取り組むのが、「みらい共創」だと

思った。自分にしかできないことや、自分なりにでも人前で発表したりできるようになりたい。

- 4/18 (金) 6限：事前授業 講師：守山市役所 環境政策課 武田みゆきさん  
目的：フィールドワークの事前学習／フィールドワークの意義  
内容：次週に控えたフィールドワークのための事前学習と、現場実習の意義



#### ▽生徒感想

- ・失敗をどんどん経験したい。自分の成長のためには殻を破ることが必要。
- ・琵琶湖のことを知り、次に行くフィールドワークがすごく楽しみになった。

※守山市広報に掲載 (2025.5月号)



#### [フィールドワーク (現場実習)]

- 4/25 (金) 5・6限：フィールドワーク (現場実習)  
Aパターン：市街地探索 協力先：みらいもりやま21  
目的：自己や他者の視点を広げ、中山道の歴史的背景に触れる  
内容：中山道をフィールドとして、班で協力をしてミッションに応じた写真撮る



#### ▽生徒感想

- ・班で協働することで、学ぶ楽しさや新しい発見があり、様々なことに興味をもつようになった。

- ・自分の家の近くに歴史あふれる街があったことが一番の驚きだった。楽しみながら学ぶことができた。

Bパターン：琵琶湖での調査・観察 協力先：守山市環境政策課

目的：琵琶湖をフィールドとして、湖の現状や自然環境保全の重要性に触れる

内容：なぎさ公園周辺にて、ホンモロコの産卵の様子、仔魚、稚仔魚の調査観察



#### ▽生徒感想

- ・実際に琵琶湖に入ること、水温や波の高さや風の強さ、においを体感できた。琵琶湖の自然の雄大さを身をもって感じる事ができた。
- ・観察中にプラスチックごみが流れているのを見て、環境に対する意識の低さを目にした。自分から取り組めることはないか真剣に考えるきっかけになった。

#### [グループワーク]

5/9 (金) 5限：フィールドワークの振り返り／グループワーク／発表

目的：フィールドワークでの気づきを言葉にする（言語化）

他者の考えや意見を受け入れ、情報を整理する

内容：気づきの共有グループワーク（KJ法）、グルーピング、プレゼン



#### ▽生徒感想

- ・「～があった。」だけでなく、どう使われていたかなどの細かいところまで考えられていた。
- ・班によって捉え方が違って、その観点の違いが参考になった。
- ・これまで視覚に頼ることが多かったが、琵琶湖に入った時に五感を使う感覚に少し気づくことができたと思う。

#### [フィールドワーク（現場実習）]

5/16 (金) 5・6限：フィールドワーク（現場実習）

Aパターン：琵琶湖での調査・観察 協力先：守山市環境政策課

Bパターン：市街地探索 協力先：みらいもりやま21

※前回のフィールドワーク先を入れ替えて実施



### [プレゼンテーション]

6/20 (金) 5・6限：プレゼンテーション準備

目的：学びの成果をプレゼンすることで、自身の考えや変化を深める

内容：プレゼンについて説明。発表資料の作成。



7/14 (月) 2・3限：プレゼン大会

内容：1学期フィールドワークに関する発表大会（テーマ：「わたしの一枚」）



### (i) - ②「企画提案型アントレプレナーシップ演習」

#### [フィールドワーク（現場実習）]

9/5 (金) 5・6限：フィールドワーク当日

目的：地域の現状を理解し、その課題解決に向けた取り組みに参画し、自らのキャリア形成にいかす

A班：「冬ホテル」商工会議所～守山駅前

守山駅前イルミネーション「冬ホテル」のデザインコンセプトを考える

B班：「遺跡まつり」下之郷史跡

「遺跡まつり」の体験ブースの企画運営を考える

C班：「クリスマス会」ほほえみセンター（児童館）

「クリスマス会」の企画運営を考える



### ▽生徒感想

- ・自分たちが関わった企画でどうやったら人を楽しませるかを真剣に考えた
- ・いつもは自分は見ている側だったけど、今回は人を楽しませる側になるので、色や形など細かいところにもこだわってやってみたい
- ・これまで下之郷遺跡の前を通っていたけど、それが遺跡だったとは知らなかった。まだまだ守山には歴史あるものが隠れているんだと実感した
- ・印象に残ったのは魚のこと。ゲンゴロウブナやニゴロブナの頭部だけが残されているのはなぜか気になった。
- ・児童館は小学生対象のイメージだったが、高校生も利用していることに驚いた。
- ・安全面と楽しさの両方を考慮してアイデアを出すのはなかなか難しいと思った。

### [グループワーク]

9/10(水) 3限：フィールドワークの振り返り／グループワーク／発表

目的：フィールドワークでの気づきを言葉にする（言語化）

他者の考えや意見を受け入れ、情報を整理する

内容：気づきの共有グループワーク（KJ法）、グルーピング、プレゼン



9/12(金) 5限：問いを鍛える

目的：マンダラートの手法を用いて、アイデア素案作成のための情報を集める

内容：グループごとにマンダラートを用いてアイデアを検討する。

9/19(金) 5・6限：アイデアの具体化、プレゼン準備

内容：企画アイデアを具体化するための整理シートを作成。中間発表の準備。



### [プレゼンテーション]

10/3(金) 5・6限 中間報告会※6限はアンケートの取り方についての授業実施

内容：各グループが考えたアイデアやコンセプトなどについて全体共有のためのプレゼン大会を行う



※発表の様子を長野県立松代高校の先生方が視察

▽生徒感想

- ・どのグループも様々なアイデアがあり、発表を見ていて楽しかった。どのようにすればいろいろな人に知ってもらえるのか、広報が難しいと感じた。
- ・いつもより大きな声で発表出来たことは、自分の成長点だと思う。
- ・1学期に発表したときよりも自信を持って発表出来た。

[企画準備]

10/10 (金) 5・6限 企画準備 ※C班児童館グループのみ、フィールドワーク実施

目的：楽しんでもらう工夫を考え、アイデアを“カタチ”にしていく。

内容：各グループで企画準備を行う



10/31 (金) 5・6限 企画準備

※A班冬ホタルグループのみ、飾り付けで守山駅前にて作業

目的：楽しんでもらう工夫を考え、アイデアを“カタチ”にしていく。

内容：各グループで企画準備を行う



[地域実践]

A班 11/7 (金) 冬ホテル点灯式当日

内容：駅前広場のイルミネーションの点灯式

※みらい共創科生徒も参加、PR プレゼンも実施



B班 11/9 (日) 遺跡祭り当日

内容：下之郷遺跡で開催された遺跡祭り

みらい共創科生徒が、弓矢体験、火起こし体験、顔ハメパネルに参画



11/14 (金) 5・6限 企画準備

※イベント終了組は5限振り返りレポート、6限は下之郷遺跡のテント片付け手伝い

C班 12/6 (土) イベント当日：ほほえみセンター（児童館）クリスマス会



※守山市の広報に掲載 (2025.12月号)



A班 1/8 (木)、1/9 (金)、1/15 (木)  
冬ホテル駅前アンケート実施



(i) - ③ 「みらいフォーラム」

[プレゼンテーション準備]

1/9 (金) 5・6限 プレゼンテーション準備、絵コンテ作成

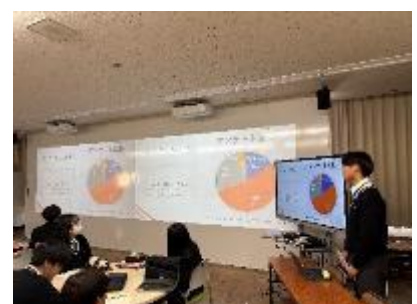
1/16 (金) 5・6限 プレゼンテーション準備、発表原稿作成

1/23 (金) 5・6限 プレゼンテーション準備、最終リハーサル

内容：各グループが実践したアイデアやアンケート結果等について、情報を整理分析し、プレゼンテーション資料にまとめる

[みらいフォーラム (成果報告会)]

2/13 (金) 5・6限 学科内成果報告会



※当日はみらい共創科の保護者も参観

※優秀班について、3月実施の運営指導委員会にて発表

(i) - ④ 「みらいノート」の作成

[定量評価の実施]

5/9 (金) 6限：Ai-GROW (1回目) 実施

目的：非認知能力の可視化、生徒がいまの自分の立ち位置を知る (現状把握)

内容：Ai-GROW の気質検査、自己評価の実施



12/9 (火) 2限 Ai-GROW 相互評価 (2回目)  
 内容: Ai-GROW の自己評価、相互評価の実施



※当日は運営指導委員会の方と交流

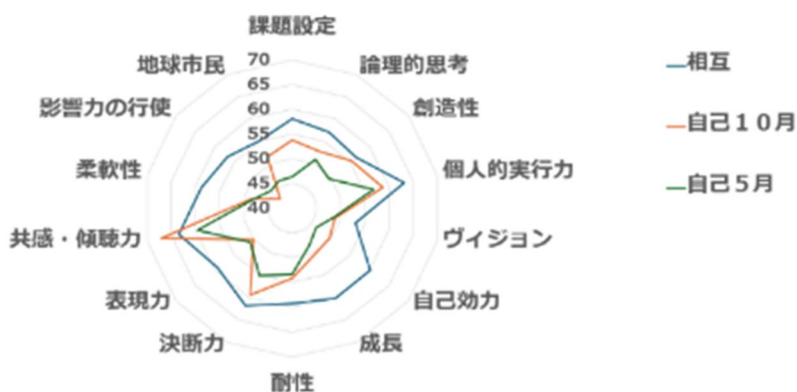
12/17 (水) IGS ソリューションズとの打ち合わせ (相互評価を終えて)

[打ち合わせ内容]

今回は初めて相互評価を実施した。(2学期一緒にプロジェクトを進めた班のメンバーを評価) 1年生時点での全国平均と大きく変わらないが、この時期に社会への関心が伸びているのは良い傾向である。今後の授業で重点的に取り組むべきは、自己評価と相互評価の差異を埋めていくこと。その際、まずは自己評価をあげていくことに取り組んでいくことによって相互評価も上がってくる。

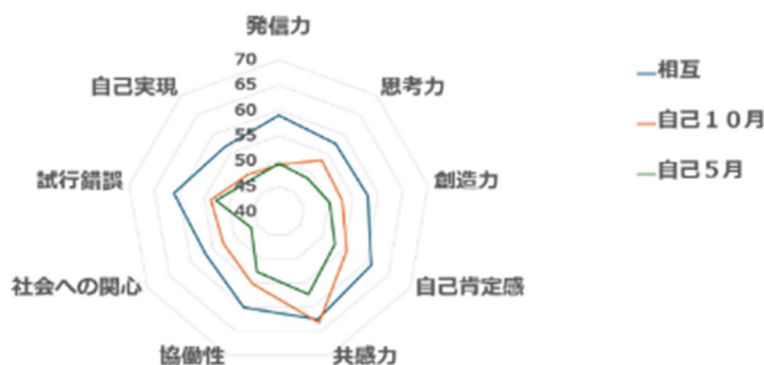
▼自己評価+相互評価の結果 (2025.12 時点)

1年生 5月-10月受検結果 平均値



▼本校のスクールミッションに応じて作成したコンピテンシー (項目)

1年生 5月-10月受検結果 平均値



### [受検結果分析・考察]

本校では、総合的な探究の時間でルーブリック評価（年複数回）を実施し、スクールミッションに応じた9つの力（表現力、思考力、創造力、自己肯定感、共感力、協働力、社会への関心、試行錯誤、自己実現）の育成に取り組んでおり、Ai-GROWにおいてもスクールミッションに応じてコンピテンシー（調査項目）を絞った。みらい共創科の1年次には、探究に関する基礎的な学びを中心に行っていたため、9つのコンピテンシーを満遍なく底上げできるようにと考え、カリキュラムを実践してきた。

今回の結果から、「社会への関心」の項目の伸びが顕著で、これは実際にアントレプレナーシップ演習として、地域社会で「やってみる」経験や「もりきた学」（総合的な探究の時間）でのフィールドワークの影響が大きかったのではないかと考察している。さらに、1年次は主にグループ単位での探究を行ってきたため、共感力や協働力の高まりがあったと考えている。地域実践後の生徒の感想においても、「責任感」「一緒にやりとげる」といったキーワードが見て取れた。2・3年次では、個人単位での探究の機会も増やす予定をしており、その中で「試行錯誤」や「自己実現」といった項目の高まりを目指していきたい。

### [プレマイプロジェクト]

1/30（金）5・6限 問いのデザイン講演 講師：成安造形大学 田口先生（本校 CN）  
目的：探究の意義、探究テーマ設定の模擬体験から学ぶ



#### 生徒感想

- ・他の人の意見を聞いて、今ある悪いところを改善したり、今やっていることを変えていくのも、地域を豊かにできる1つのアイデアだと気づいた。
- ・当たり前を問い直すというのが印象に残った。
- ・一人でテーマを作るのは難しいけれど、みんなとすると作れるようになる。
- ・豊かさ=良いところという固定概念があることを知った。

2/6（金）5・6限 市役所コラボ授業

目的：次年度の活動に向けて、市内で活動する様々な団体との交流を図る

内容：市民団体への取材体験、交流会

協力していただいた団体様（敬称略）

- ・認定 NPO 法人 びわこ豊穡の郷
- ・一般社団法人 yourship
- ・NPO 法人 滋賀ものづくりネット
- ・フードバンクびわ湖 守山支部（守山市役所市民協働課）
- ・もりやまこども日本語学習クラブ
- ・公益社団法人 守山青年会議所



## 生徒感想

- ・班との活動でみんなと話し合いも出来たし、意見とかをいっぱい出せたから良かった
- ・こういう団体が守山市にあることを知らなかった。どういう活動しているのかを聞いてこういう活動に1回でも参加してみたり、少し周りにも話したいなと思うことができた。
- ・普段知らないことを知れて、さらに事業の方に質問もできた。どんなことをしているか、何を大事にして活動されているかなど、とてもたくさんを知ることができました。

## (ii) みらい共創Ⅱ（2年）を見据えた試行モデル授業

### [実践型インターンシップの試行実施]

「みらい共創Ⅱ」（2年次）カリキュラムの検討にあたり、普通科2年生の就職希望者を対象に実践型インターンシップを試行実施した。市内企業、守山市役所の協力を得て、希望者が事前学習から実地体験、リフレクション（成果報告含む）までを行った。

（協力企業）順不同

- ・旭化成株式会社
- ・日本マタイ株式会社
- ・株式会社三社電機製作所
- ・グンゼ包装システム株式会社



### ▼事後アンケート結果（対象：参加者12名）

Q1 インターンシップに参加する前の気持ち

- ① やってみたいと思った（9） ② やりたくなかった（0） ③ どちらとも思わなかった（3）

Q2 インターンシップで自分が行った仕事（企業）に対し、以前に持っていたイメージ

- ① よい（5） ② よくない（1） ③ どちらともいえない（6）

理由

- ・〇〇を作る会社というのは知っていた
- ・工場内は暑くて、厳しい人が多いイメージだった
- ・生産ラインの作業は簡単だと思っていた
- ・話を聞くまでは、どのような工場なのか、知らなかったから
- ・夜勤があつてピリピリ感があると思っていた
- ・ミスは絶対に許されないと考えていた。
- ・大きい会社なのですごく忙しいと思っていた。

Q3 実際に行っておこなった作業について

- ① よかった（12） ② よくなかった（0） ③ どちらともいえない（0）

理由

- ・機械の種類が多く、それを操作するなどして働いている人の姿を間近に見れた

- ・作業は難しかったけど、達成感があった
- ・普通に学校で生活していたら知れないことをたくさん知れたから
- ・実際楽しかったし、自分でも上手に作業できたから
- ・優しく教えていただき、職場の雰囲気も温かく、楽しく参加できた。
- ・自分たちの生活に身近なものでも作るのが大変なのがわかった。
- ・本当の社会で仕事をされている方の大変さがわかった。

Q4 インターンシップで主にどのようなことを学んだか（2つ回答）

- ・働くことの楽しさ（4）
- ・働くことの厳しさ（4）
- ・時間を守ることの大切さ（1）
- ・高校と社会の違い（3）
- ・専門性の必要性、大切さ（0）
- ・挨拶や言葉遣いなどのマナーの大切さ（5）
- ・人間性やチームワークの大切さ（5）
- ・社会の中で企業の役割や果たす責任（2）

Q5 インターンシップ期間中の自分の取り組み方について

①非常によかった（4） ②よかった（6） ③どちらともいえない（2） ④よくなかった（0）  
理由

- ・気になることがあればその場ですぐに質問できた
- ・しっかりと話を聞けたし、挨拶もできたから
- ・真面目に取り組むことができた
- ・自分から質問したり、答えたりして、コミュニケーションをとることができた
- ・自分の中で大切にしようと思ったことが見つかった
- ・もう少しメモをとれていればよかった
- ・言葉遣いや態度に気を付けることができたから
- ・事前に会社について調べてから行ったことで、説明などもよく理解できたから

Q6 インターンシップを終えての気持ち

①非常に満足している（8） ②満足している（4） ③どちらともいえない（0） ④満足していない（0）

理由

- ・実際に働いている人を見てよかった
- ・インターンシップを受ける前のイメージと全然違うことを知れたから
- ・先輩との交流が楽しかった
- ・確実に自分のためになったと思うから
- ・普段から危険について考えるメリットが分かったから
- ・就職したい気持ちが高まった
- ・働くことのイメージが具体的になったから

Q7 将来の進路先決定の重要なポイントは何ですか（2つ回答）

- ・給料（賃金）（9）
- ・自分の興味関心や能力に合致しているか（7）
- ・自分が勉強してきた専門性をいかせるか（0）
- ・企業の規模、安定性、将来性（4）
- ・勤務場所や通勤時間（4）
- ・社会に貢献できる仕事内容であるか（0）

Q8 今回のインターンシップが自分の進路決定に役立つと思いますか

①思う（12） ②思わない（0） ③わからない（0）

Q9 今回のインターンシップが今後の学校生活に影響を与えますか

①思う（11） ②思わない（0） ③わからない（1）

Q10 インターンシップについて、学校や実習先に対しての要望（あれば）

- ・もっと実習の期間を長くしてほしい（2）

▼事後報告レポートより（生徒感想の抜粋）

- ・工場で働く際には常に危険があると学んだ。そのためにKY（危険予知）が大事だと教わった。
- ・働いている方の仲が良さそうで、コミュニケーションの力が大切だと思った。
- ・品質検査体験の時、検査が終わったときに達成感を感じた。
- ・声を大きくしてはきはきと話すことが大事だと学べた。
- ・インターンシップを通じて、社会で働くためには「あきらめない心」を持つことだと思った。
- ・挨拶、わからないことがあればすぐに話を聞くこと、時間を守ることが社会人としてのマナーにあたると思う。
- ・学生のころにもっと勉強をしておけばよかったと先輩方の話を聞いて、9月からもっとがんばろうと思った。
- ・あいさつ、言葉遣いに気をつけて発話することが社会人としてのマナーだと思った。
- ・基板づくりをさせてもらって、機会を操作してモノづくりするのがすごく楽しかったし、興味もわいた。将来の就職の選択肢になりました。
- ・基板が完成した時うれしかったし、自分のつくったものが人の役に立っていると思ったら、やりがいになると思った。
- ・基板が完成した時の達成感があった。働くやりがいにつながると思う。
- ・一つ一つの機械を扱うにあたって、責任感が大事だと知った。
- ・社会を支えたり、人々の暮らしに貢献するところに「やりがい」を感じた。
- ・人に合わせるよりも、自分がやりたいことをもっと考えようと思った。

(iii) 総合的な探究の時間「もりきた学」

(iii) - ①もりきた学Ⅰ（1年）

学年テーマ“人に会う”

概要：探究的な学びに必要な基礎スキル習得を目指すプログラム。前後半の2部制として、前半部では、本校スローガンである“人を想う心”について、各クラステーマ作成やアイスブレイクを通じて、集団理解と共創のための土台作りをメインに行った。後半部では、守山市の北部エリアをフィールドとし、地域が抱える課題について、フィールドワーク等を通じて学んだ成果をスライドにまとめ、発表会を実施した。

（内容：前半部）

- ・「人を想う心」…本校スローガンに関するワークショップ（クラスのテーマ決定）
- ・「コ・クリエーション」…共創スキルの習得を目指すワークショップ  
（伝言ゲーム、集団理解、ペーパータワー）
- ・「文献調査」…アクティブブックダイアログで要約のコツやまとめ方を習得する
- ・「SDGs ボードゲーム」…ボードゲームを通じて、社会課題を自分事として考える



(内容：後半部)

- ・「住人叶色」…本校周辺で事業を展開されている方々に取材を行い、その方のキャリアを体感し、そこから得た学びをスライドにまとめ、発表する。



Vita、鉄人工房マツヤ、ひなぎくこども園、びわこ地球市民の森、大庄屋諏訪家屋敷、BIWAKO DAUGHTERS、びわこパールサプライズ、はすねだこども園、滋賀県立琵琶湖博物館、ゆいの里、よってこファーム、あんくるトム、地域おこし協力隊

- ・「もりきたフォーラム」… 1年間の成果をスライドにまとめ、クラスでプレゼンを行う

(iii) - ②もりきた学Ⅱ (2年)

学年テーマ“地域に出会う”

概要：1年次に行った住人叶色（フィールドワーク）の連携先を中心に、地域の現状や課題

を調査し、そこから高校生ができることを地域で“試す”プログラム。年間3回のフィールドワークとその前後学習を充実させた“住人叶色Ⅱ”を実施した。

(内容)

- ・「地域で探究する講演会」：守山市環境政策課の方による探究学習の導入講演会
- ・「高校生ができる探究講演会」：本校 CN による探究学習の導入講演会
- ・「地域で試すフィールドワーク」：自ら課題を設定し、取材等を繰り返し、解決策を提案・試行するサイクルを行う(MORE OODA)



(連携先)

井入農園、Vita、河西いちご園、きたむら果樹園、キヨシ商会、鶴屋吉正、鉄人工房マツヤ、ととや平畠、ひなぎくこども園、びわこ地球市民の森、BIWAKO DAUGHTERS、びわこパールサプライズ、メガネのムラタ、守山市環境政策課、ゆいの里、よってこファーム  
(各連携先との到達点)

No	協力依頼先	概要	内容 ※第2回目以降の内容(第1回は取材、第2回の提案検討試行、第3回の試行やまとめなど)
1	井入農園	ハーブの活用について	ハーブの様々な活用を考えるため、月桃を蒸留したスプレー(香り)を用いて使用方法や標本などのアンケートを行った。
2	Vita	野菜の良さを伝えるために	農壇の作業(青菊の収穫など)を体験し、野菜の良さ(安全性、品質、味など)を広く伝える方法をポスターなどで提案した。
3	河西いちご園	イチゴスイーツの提案	いちごを用いたオリジナルスイーツを提案し、連携先と連携し試作と改良を重ね、ポスターなどを制作し、実際に販売した。
4	きたむら果樹園	梨とフードロス、スイーツ開発	様々な品種の梨を収穫しその特徴を踏まえ、フードロスにならないオリジナルスイーツの開発を行い、レシピにまとめた。
5	キヨシ商会	安全で楽しいサイクリングロード	この地域で安全に楽しくサイクリングができるように、サイクリングコースを考え試走し、サイクリングマップにまとめた。
6	鶴屋吉正	和菓子の魅力について伝える	オリジナルデザインの和菓子(琥珀糖)を制作しラッピングを行った。その様子をPR動画にまとめ、お菓子は販売された。
7	鉄人工房マツヤ	印刷デザインという仕事を考える	オリジナルプリントの良さを学ぶために、修学旅行の際にスーツケースにつけるタグをクラス別用にデザインし、制作した。
8	ととや平畠	シーフードカレー販売と看板製作	オリジナルシーフードカレーの検討と販売を行い、お店の立地を踏まえた宣伝看板(飛び出しととや君)の制作を行った。
9	ひなぎくこども園	幼保の保護と遊びについて考える	自分達で考えた遊びや絵本読み聞かせを行い、先生方のアドバイでさらに改善し、こども保護についての理解を深めた。
10	びわこ地球市民の森	森を知り、活かし、共生するには	この森や施設にさらに利用者が関心を持ち使いやすくなるように、土中の生物の調査やキノコポスト標識の制作を行った。
11	BIWAKO DAUGHTERS	琵琶湖の魚、食との関わり	琵琶湖の湖魚料理を知り、スリ漁の体験などを通して、その現状と良さを知り、オリジナルメニューを提案した。
12	びわこパールサプライズ	びわこパールに触れて伝える	びわこパールで作品を製作しその良さや特徴を知り、店頭ディスプレイや紹介動画、ポスターを制作し、その伝え方を考えた。
13	メガネのムラタ	町おこしについて考える	守山祭りやビーチサッカー大会(8月)取材し、参加者や関係者にインタビューを行い、PR方法(ポスター制作)を考えた。
14	守山市環境政策課	琵琶湖湖の環境とゴミ問題	琵琶湖湖に入り、赤野井港などを調査する中で、その様子やゴミの放置などの現状から、環境課題やその解決方法を考えた。
15	ゆいの里	高齢者との交流を通して	自分たちで企画した遊び(スマホ、話しあい)を高齢者で行い、各回の反省からさらに改善し、高齢者との関わり方を考えた。
16	よってこファーム	野菜の良さを伝えるために	農壇の作業(人参収穫など)を体験し、野菜の良さ(安全性、品質、味など)を広く伝えるポスターやステッカーを提案した。

- ・「もりきたフォーラム」… 1年間の成果をスライドにまとめ、クラスでプレゼンを行う  
 ※11/29（土）みんなの経済新聞に掲載



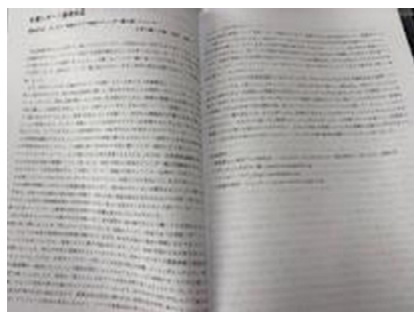
### (iii) - ③もりきた学Ⅲ（3年）

学年テーマ “己に出会う”

概要：これまでの学びを自分自身の希望進路とリンクさせながら、個人単位での自己探究を行う。前半はテキストを活用して志望理由書を書き、後半は個人の興味関心に応じてレポートを作成する“卒業レポート”の作成に取り組んだ。

（内容）

- ・「志望理由書」：これまでの学びと自身のキャリアについての考えを整理し言語化する
- ・「卒業レポート」：自身の興味関心に応じて探究テーマを設定し、レポートにまとめる。



### (iv) 進路行事「キャリアデザイン」

<1年生>

- ・「文理選択講演会」

日時：2025年5月14日（水）6限

講師：倉部 史記先生（進路指導アドバイザー/追手門学院大学客員教授）

目的：文理選択について具体的なイメージをつかみ、将来の職業との関わりや進路について考える機会とする。

内容：1年生の一学期末に文理選択を行うにあたり考えるべきことを聞く

- ・「進路コント・職業人講話」

日時：2025年10月1日（水）5・6限

目的：1年生の生徒が、職業分野の話聞くことで知識や見解を深め、卒業後の進路を考える一助とする。

- 内容：5限 芸人による寸劇 ～フリーターと正社員の違いから  
 (雇用形態の違い、給与・収入の相違、やりがいなど進路選択の重要性等を  
 コントを通して伝える。)
- 6限 職業人の話 (スポーツトレーナー、販売職等)  
 (3名の職業人から業務内容や仕事のやりがいなど、体験談を交えた生の声を  
 聞く)



- ・「進路見学バスツアー」  
 日時：2025年12月11日 (木)  
 目的：現場を見て感じることで、進路意識の向上につなげる  
 内容：大学・専門学校・企業のいずれかを訪問見学する。生徒の希望に応じて 5 台の  
 バスに分乗し、それぞれ異なるコースで見学を実施。10 月下旬にアンケート調  
 査を実施し、アンケート結果をもとに、訪問先の調整を行った。

#### < 2 年生 >

- ・「分野別説明会」  
 日時：2025年7月10日 (木) 2・3限  
 目的：2 年生夏休み課題としてオープンキャンパス参加を課す。見学体験を通して進路  
 先の 具体的なイメージを持ち、進路選択を考える機会とする。事前準備としてこ  
 の分野別説明会を行う。(就職希望者は就職講座、企業調べ)  
 講師：大学・専門学校等学校関係者30校程度  
 流れ：事前アンケート(6/12 実施)で選んだ 3 校の説明会に参加する。(一講座 30 分×3  
 つ)  
 ※就職希望者は、業界研究講座または公務員講座+説明会 1 校に参加  
 ※夏休みオープンキャンパス参加後、報告書を担任へ提出することとする。



- ・「大学、専門学校模擬講義」  
 日時：2025年10月1日 (水) 5・6限  
 目的：大学や専門学校の授業を体験し、進路選択に役立てる。  
 内容：50分×2講座を受講する。企業研究講座も開講  
 \*協力業者は株式会社TAP



・「ようこそ先輩」

日時：2026年3月10日（火）9:00～

目的：学生・社会人として活躍する先輩（本校卒業生）の話を聞き、自分自身の進路を考える機会とする。

内容：卒業生の自己紹介とインタビュー形式による進行（司会は進路課教員）

<主な質問内容>

- ・現在、どのような仕事（勉強）をされていますか
- ・現在の生活の一日の流れを教えてください
- ・その進路（進学先・就職先）で大切にしていることは何ですか
- ・楽しいこと、大変なことは何ですか
- ・後輩へのアドバイス

▼昨年度の様子



・「企業セミナー」

日時：2026年3月18日（水）9:00～

対象：2年生就職希望者

目的：高校生が就職後、社会で働くこと、企業で働くことの意義と現況実態を理解する機会づくり

高校生の社会人となる前の心構えづくり

内容：守山市役所の協力を得て、市内企業8社をお招きし、企業で働くことについて、社会人として大切にすべきことなどを説明していただく。

▼昨年度の様子



### <3年生>

#### ・「応募前企業見学」

期間：2025年7月22日（火）～8月4日（月）

対象：学校斡旋希望者35名（5月末日現在）

内容：見学は一人2社程度。7月中旬の就職ガイダンス終了後、各生徒が引率の先生との打ち合わせ（顔合わせと日程や集合場所・連絡先の確認）

### 【取組に対する成果と課題】

#### [成果]

#### ①本校の教育方針や新学科、総合的な探究の時間の取組に対する地域理解の広がり

この3年間の様々な取組によって、本校の教育方針や新学科のコンセプトは少しずつではあるが、地域へと広がりを見せている。授業協力の依頼を行う際のスムーズさであったり、反対に地域側から授業協力の依頼を受けたり、様々なイベントへの参画依頼があったり、生徒が地域社会で活躍する機会、環境が整ってきている実感を持っている。これには、後述するが、地域協働研究同好会の設置が大きな役割を果たしている。一方で、高校生への期待の声が大きいため、生徒がある種の一労働力として扱われてしまう危険性もあり、連携先との丁寧なヒアリングも同時に必須である。

#### ②地域と連携した探究的な学びによる成長のデータ化

生徒の非認知能力の向上を一つの教育目標としているため、具体的な変容を数値で測れるように研究を進めてきた。総合的な探究の時間では、学校独自のルーブリックを活用した自己評価と、みらい共創科については定量評価アプリ「Ai-GROW」を導入した。中学校や地域社会への広報においても、こういった非認知能力向上の結果を活用することにより、地域と連携した探究的な学びの意義を伝えていけるようになった。

#### ◇経年変化分析（2025年度は、2024年度に比べて）

- ・1年生は他学年と比較して全体的にスコアが高い（学年別ルーブリック）
- ・1,2年の学びを通して、「社会への関心」が高まっていると考察できる（学科別・学年別ルーブリック）
- ・2年は微増しているが、全体として「思考力」と「試行錯誤」の項目のスコアが低くなっている（学年別ルーブリック）
- ・3年は全てのスコアが低くなっている（学年別ルーブリック・昨年度比較）

#### ◇学科別（1学年の普通科とみらい共創科） ※学科別ルーブリックより

- ・3学期のみらい共創科の生徒は、全ての項目において普通科の数値を上回った
- ・みらい共創科の生徒の伸び幅に注目すると、特に「表現」「発信」、「創造力」、「社会への関心」が高くなっている。  
（「みらい共創」のカリキュラムが大きく影響したと考えられる）
- ・普通科の生徒も1学期に比べるとすべての項目で微増している。
- ・普通科は他の学年では低い傾向の「思考力」、「社会への関心」について数値が高い。  
（学年別ルーブリック）

▼育成したい9つの力

# & MORIKITA

## 未来を切り拓く9つの力



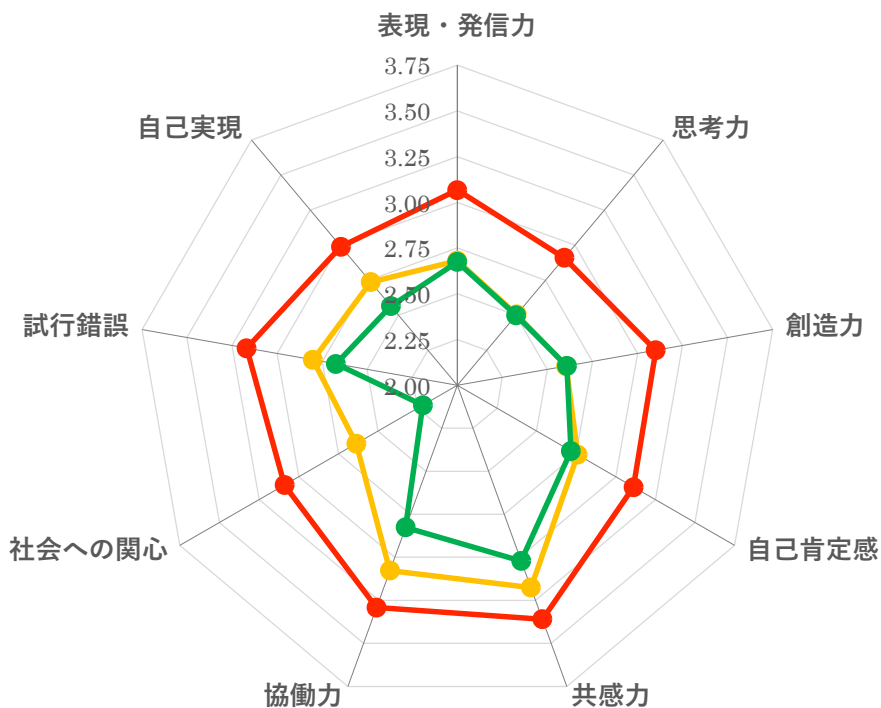
### & Together (協働力)

これら全ての力を携え、仲間と共に歩む力です。  
「組」の力を掛け合わせることで、一人では到達できない大きな成果や喜びを分かち合います。

<div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>M inds (思考力)</b> 自ら問いを立て、深く考える力です。 表面的な情報に惑わされず、本質を見極める姿勢を大切にします。</p> </div> <div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>O utput (表現・発信力)</b> 自分の考えや想いを形にし、周囲へ届ける力です。 言葉や作品を通じて、自らの意志を社会に投影します。</p> </div> <div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>R espect (自己肯定感)</b> ありのままの自分を認め、尊重する心です。 自分を信じる強さが、他者への優しさや挑戦する勇気の土台となります。</p> </div> <div>  <p><b>I nspiration (創造力)</b> 新しいアイデアや価値を生み出すひらめきです。 自由な発想で、既成概念にとらわれない未来を描きます。</p> </div>	<div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>K Indness (共感力)</b> 他者の痛みや喜びに寄り添い、思いやる心です。 多様な価値観を理解しようとする姿勢が、信頼関係を築きます。</p> </div> <div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>I nterest (社会への関心)</b> 身の回りの出来事や社会の課題に目を向ける好奇心です。 広い視野を持つことが、自らの行動の目的意識を明確にします。</p> </div> <div style="margin-bottom: 10px;">  <p><b>T rial (試行錯誤)</b> 失敗を恐れずに挑戦し、改善を繰り返すプロセスです。 粘り強くやり続ける経験が、真の知恵と力を養います。</p> </div> <div>  <p><b>A chievement (自己実現)</b> 自らの目標を達成し、なりたい自分に近づくことです。 一歩ずつの積み重ねが、人生の充実感へとつながります。</p> </div>
--	--

▼学年別ルーブリック結果 (2025年度3学期実施)

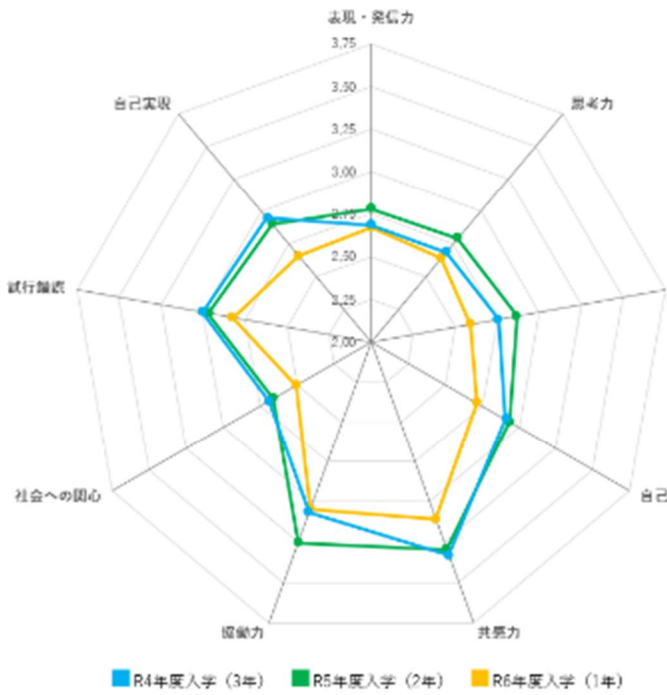
### 2025年度 3学期



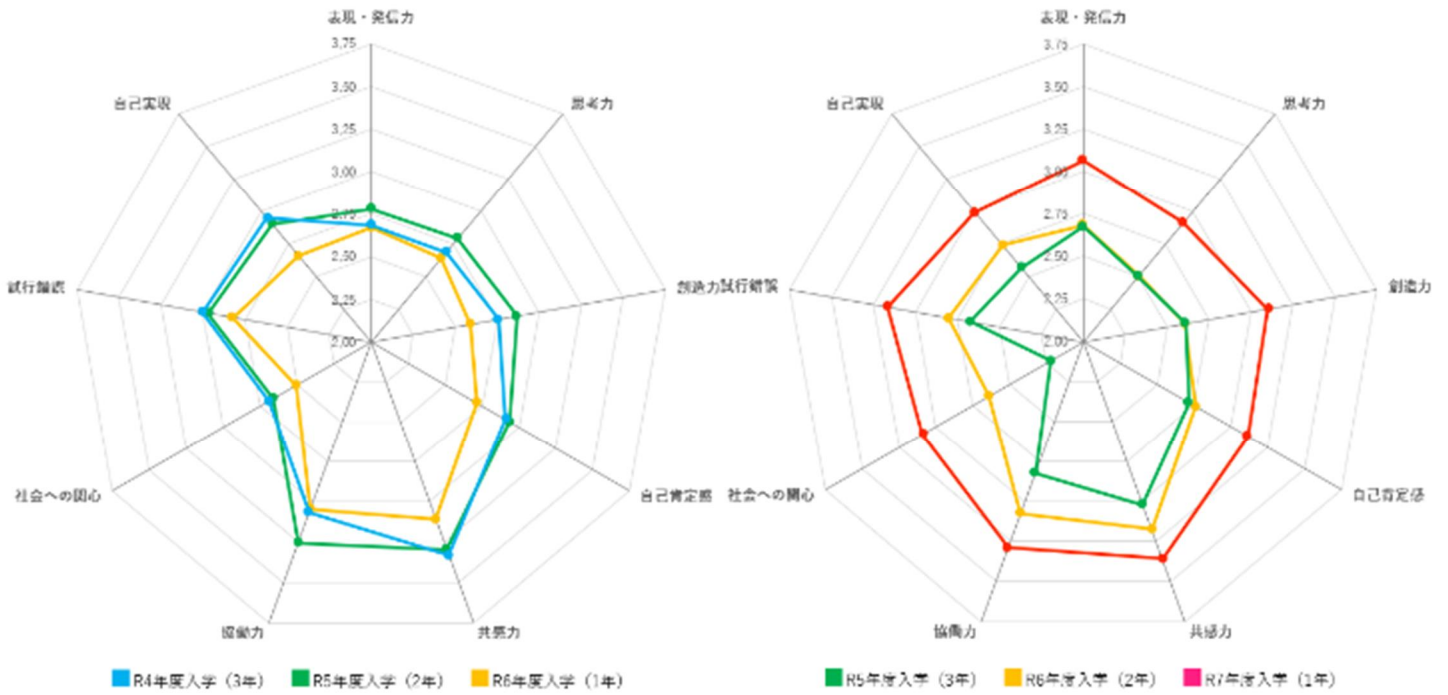
■ R5年度入学 (3年)    ■ R6年度入学 (2年)    ■ R7年度入学 (1年)

▼昨年度実施したルーブリックとの比較結果

2024年度 3学期

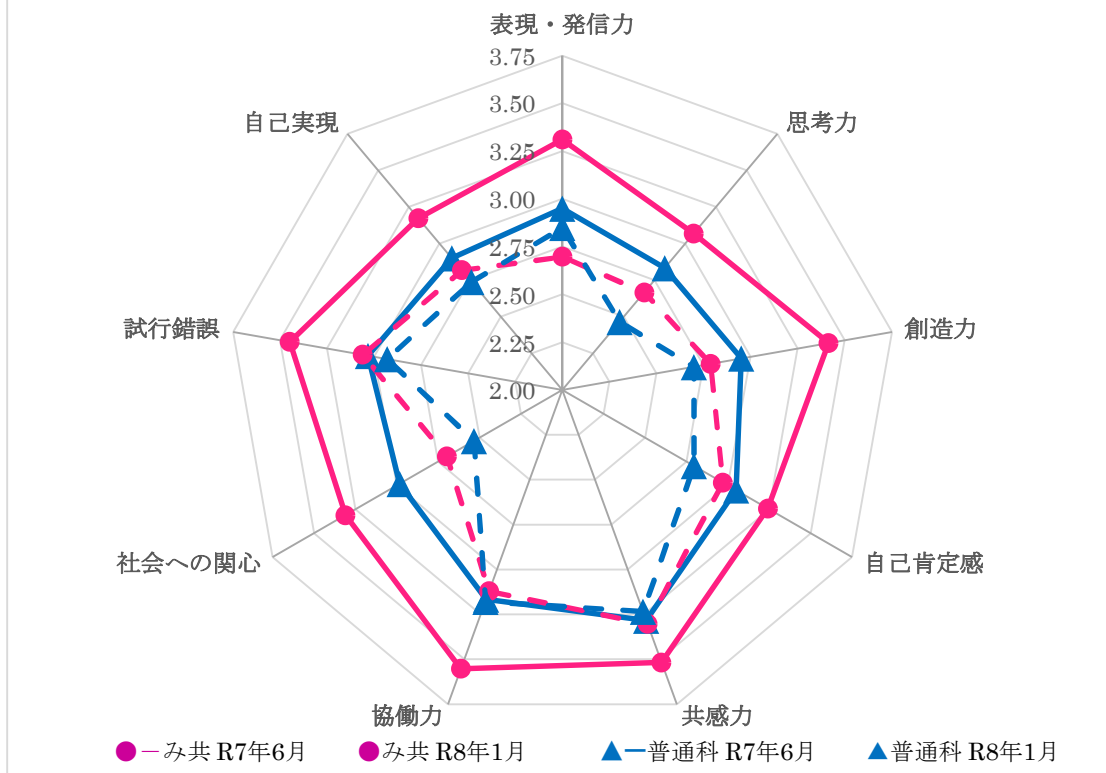


2025年度 3学期



▼学科別のルーブリック結果

2025年度 1年 学科別 の変化



### ③「守山北高校」の特色化

「魅力の感じにくい普通科」という看板を塗り替えるための取組は、一定の成果があったともいえる。生徒募集の倍率だけでなく、近年の中学生体験入学の参加者数の顕著な増加が見られる。また、体験入学時の学校紹介（広報内容）においても、みらい共創科の取組や総合的な探究の時間の実践、また生徒による成果発表を行うなど、これまでの学校紹介からは確実にブラッシュアップできている。

#### ▼体験入学の参加者数（データ未保存のため、一部申し込み人数となっている年あり）

実施年度	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
参加者数 第1回	426	320	215	208	230	331	362
参加者数 第2回	66	中止*	31	44	20	43	116

\*コロナによる中止

#### ▼入学者数の推移

入試年度	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
募集定員	200	200	160	200	200	200	*160
入学者数	200	183	153	149	142	125	*132
充足率	100%	91.5%	95.6%	74.5%	71.0%	62.5%	82.5%

\*みらい共創科（37/40名）

#### [課題]

##### ① 教科・分掌へのひろがり

みらい共創科や総合的な探究の時間での探究的な学びを、いかに単発のものにしないかが重要だと感じている。本校の教育方針やビジョンを全教員で共有しながら進めていくことが必要で、我々教員の授業改善を含む、学校全体の取組になればと思う。昨年同様、芸術科や理科で地域と連携した授業を展開していたが、今年度は家庭科で保育実習を実施したり、体育科で外部講師と連携してダンスの授業を行ったり、学びを学校内で留めないような取組が少しずつではあるが増加している。推進担当としては、今後も引き続き生徒の感想や成長した姿、地域の方の声をなるべくスピード感を持って共有するよう心掛けていきたい。

#### ▼教科における地域連携の取組の様子



保育出前講座  
(関西福祉大学)



ダンス出前講座  
(スタジオ シンク)



電池出前講座  
(旭化成株式会社)

また、昨年度完成した「学校改革プラン」については、年度当初の各分掌で行われる話し合いの際に活用してもらい、重点目標の設定を行った。1月には総括の会議も実施され、各

分掌における達成度や検討課題も共有できたのは一定の成果と言える。しかし、今後の取組自体の方が重要であり、各年次での再検討や議論をさらに深めていく必要があるが、新たな取組の積み上げと同時に、業務分担の見直しも行う必要がある。

### ▼学校改革プラン

#### 滋賀県立守山北高等学校 学校改革プラン



### ② 進路意識の向上

生徒の進路支援の在り方についても、この3年間で大きく変容した。以前は、進路指導課が主導となって、生徒やその保護者に対して様々なアプローチを行う時期は2年生の後半（12月修学旅行後）になってからと、比較的遅い時期に行われていた。そこで今年度については各学年の各学期ごとに、自分自身のキャリアを考える機会となるような取組が行われてきた。しかし、現状生徒の進路希望（2026年1月実施）でも、卒業後の自身の進路を具体的にイメージできている生徒はまだ多くないように感じている。（アドバンス補習への参加人数や基礎力診断テストの結果、具体的な志望校や業種が空白になっている生徒が多い現状より）今年度の取組の結果も分析しながら、教務課と進路指導課が連携を強化しながら来年度の計画に反映させていきたい。その際、教務課として進める探究を通じたキャリア観と進路指導課が進める進路支援が縦割りにならないよう留意しなければならない。

#### <進路希望調査>（2026.1時点）

	四年制大学	短期大学	看護専門	専門学校	公務員	就職
1年生	37	5	6	42	11	49
2年生	31	8	3	32	4	28

### ③みらい共創科 進路保障体制

みらい共創科の生徒に対する進路指導については、これまでの本校の進路支援+αで必要となることが予想される。具体的には、探究的な学びの成果をいかした入試に挑戦することである。これまでにも、総合型選抜での大学受験をしていた生徒もいたが、担任や進路課が個別対応していた。今後、総合型選抜での受験数が増加することへの対応として、学校内の組織体制の整備が急務である。進路指導課が中心となって、総合型選抜への対策やその指導の在り方も次年度検討が必要である。

#### ④もりきた学の運用

この2年間での学校改革の柱であった「もりきた学」（総合的な探究の時間）については、2年間のカリキュラムを一新することができた一方で、多くの課題も見えてきた。それは連携先の精選である。普通科も含めた学年全員で取り組む「総合的な探究の時間」として“人に出会う”というテーマのもと、学校周辺の地域人を研究対象としたため、より多くの生徒の受け入れに対応できるか、また日程調整が柔軟か、1年次向き、2年次向きなどの連携先の選定が必須であることがわかってきた。この2年間での取組をベースに、次年度の探究計画につなげていきたい。

#### (2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和4年度から概ね10年から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について全県の視野で基本的な考えを示す「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」を令和4年3月に策定した。令和5年3月には、この「基本方針」に基づき、全県の視野から各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を作成し、各県立高等学校の魅力化の取組を推進している。

この「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、今年度は守山北高等学校を含む地域連携重点校各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有する形で実施した。

また、今後、児童・生徒数の大幅な減少が見込まれることや、高校授業料無償化の拡大、通信制高校への進学者の増加など、高等学校教育を取り巻く環境も大きく変化していることを受け、令和7年度に改めて県立高等学校の在り方について検討する附属機関「滋賀県立高等学校在り方検討委員会」を設置した。

守山北高等学校は、地域の未来を担う人材育成を目指して地域の課題解決に向けた学びや、外部人材の活用や地域を教育資源としたフィールドワーク等による体験的な学びに取り組む地域連携重点校として、普通科の特色化に向けたカリキュラム等の検討を行っており、かつ関係機関や市町等の協力体制など取り組みやすい条件が整っていること等から、新学科設置に向けた研究を進め、本年度「みらい共創科」の設置に至った。

事業の実施にあたっては、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事1名、主担当として教育企画主事1名、主任主事1名をその任に充て、学校の支援を行ってきた。適宜、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、3回開催した運営指導委員会では、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、外部有識者による指導・助言・評価を行うことで、以後の事業運営に役立ててきた。

令和8年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状況は例年と比較してやや増加した。守山市内外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

## ■協議や先行実施授業等への参加状況

活動日程	活動内容
R7. 4/ 1	・運営指導委員を委嘱
R7. 4/10	・本年度就任の運営指導委員川瀬委員へ事業説明
R7. 4/15	・今後の取組について学校と協議
R7. 4/25	・みらい共創科フィールドワーク見学（中山道）
R7. 4/28	・「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム」 令和7年度第1回理事会 に出席 ▶ コンソーシアム設置目的と運営体制、名称、規約等について
R7. 5/16	・みらい共創科フィールドワーク見学（琵琶湖）
R7. 6/14	・新学科説明会
R7. 7/16	・第1回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、今後に向けた課題、方向性に関する指導・助言
R7. 8/23	・滋賀の私立学校展 2026 にて学校案内配布（草津会場）
R7. 8/30	・滋賀の私立学校展 2026 にて学校案内配布（彦根会場）
R7.12/ 9	・第2回運営指導委員会 ▶ 授業参観、最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言
R8. 3/23	・第3回運営指導委員会 ▶ 生徒による成果発表、これまでの取組に関する総括的な指導・助言

## 課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校は、地域をフィールドとした探究的な学び、地元地域行事への参画など数多く実施されており、新学科での学びがより充実したものとなるよう、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を適宜行うとともに、生徒の成果発表等の学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やコーディネーター等と共有しながら進めていく。

### (3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

#### (i) 新学科推進室

今年度についても、新学科推進室を教務課内に設置し、主に新学科のカリキュラム、地域との連携強化を進めてきた。本事業の1年目から振り返ると、次第に会議の回数も減らしながら、これまで検討してきた授業を実践することに注力した3年目であった。推進室では、みらい共創科の主任に加え、総合的な探究の時間を「学年担当制」とし、3名の教員が探究に関わってきた。また、様々な授業、課外活動等においてコーディネーターの2名がサポートに入る形で1年間を終えることができた。

#### (ii) 地域協働研究同好会の設置（2025年3月発足）

本年度から新たに地域協働研究同好会を発足させた。先述したように、近年地域からの生徒派遣や授業協力の依頼が増加する中で、これまで地域とのパイプ役であった生徒会執行部では、校内行事との兼ね合いやその年の人数等により、依頼を受け入れできない状況があった。そこで、生徒会執行部とは別に（兼部可）、ボランティアセンターの機能となるような同好会の設置に至った。授業の枠に収まらない課外活動を充実させたことは、生徒の自己肯定感や有用感を高めたり、地域と接する機会を増やせたことにつながった。この同好会が新学科や総合的な探究の時間との色分け（スムーズな運営）を可能としたとも言える。以下は1年間の活動の様子である。

【実際の様子】

・ルシオールアートキッズフェスティバル

日時：5月18日（日）9：00～12：00 参加生徒：1年生11名

内容：子ども向けのアートワークショップ（出展：佐川美術館）の受付や、活動の補助

会場：立命館守山高等学校



・LAKE BIWA TRIATHLON

日時：6月29日（日）7：30～12：00 参加生徒：1・3年生 計9名

内容：トライアスロン参加選手への応援・サポート

場所：琵琶湖沿岸



・野洲川冒険大会 いかだくんだり

日時：7月6日（日）8：30～15：00 参加生徒 1・2・3年生 計14名

内容：参加した子どもの活動補助・いかだくんだり体験

会場：野洲川（新庄大橋上流）



・つがやまマルシェ

日時：8月10日（土）15：30～20：00 参加生徒 1年生9名

内容：子ども向けの縁日スペースの運営、駅前でのPR、ポップアップストアの販売



・都賀山マルシェ

日時：9/20（土）9：00～11：00 17：00～20：00

内容：笠原しょうがの収穫・販売

@ライズヴィル都賀山



日時：10/19(日)9：00～14：00

内容：ポップコーン販売・シールラリー

@ライズヴィル都賀山



・守山学園周年祭

日時：10/26(日)9：00～15：00

内容：ポップコーン販売（社協と共同で出店）

@守山学園



・文化財フェス

日時：11/16(日) 9：00～15：00

内容：体験ブース（吹き戻し作り・絵本作り・扇子作り・藍染体験）

@大庄屋諏訪家屋敷



・ルシオールカーニバル

日時 11/23 (日) 9：00～15：00

内容：盲目体験ブース（目隠しパズル・点字シール作り）

@守山市民ホール



・地域の清掃活動

日時：11/29(土)9：00～12：00

内容：学校周りの溝掃除（近隣の福祉施設と合同で活動）



・フリースクールの子もたちと交流

日時：12/8(月)13：00～15：00

内容：バスケットボール・ケイドロをして遊んだ（小学生4名が参加してくれた）

@ゆいの里



・co.shiga  
 日時：12/13(土)12：00～13：00  
 内容：活動発表・トークセッション  
 @立命館守山



・モリヤマイチ  
 日時：12/21(日) 10：00～15：00  
 内容：かごかきレース・電子投票の補助  
 @守山駅前



・学びの祭典  
 日時：12/26(金) 9：00～17：00  
 内容：アントレ成果発表  
 @プロシードアリーナ HIKONE



・福祉の“壁”をこわす  
 日時：絵を描く作業 2/5(木)、12(木) 16：00～17：00  
 壁を壊す作業 3/5(木)13:00～14:00  
 内容：福祉施設と学校の間にある目隠し用壁をこわす  
 @ゆいの里





## (5) コンソーシアムの体制および取組

### コンソーシアムの本格始動

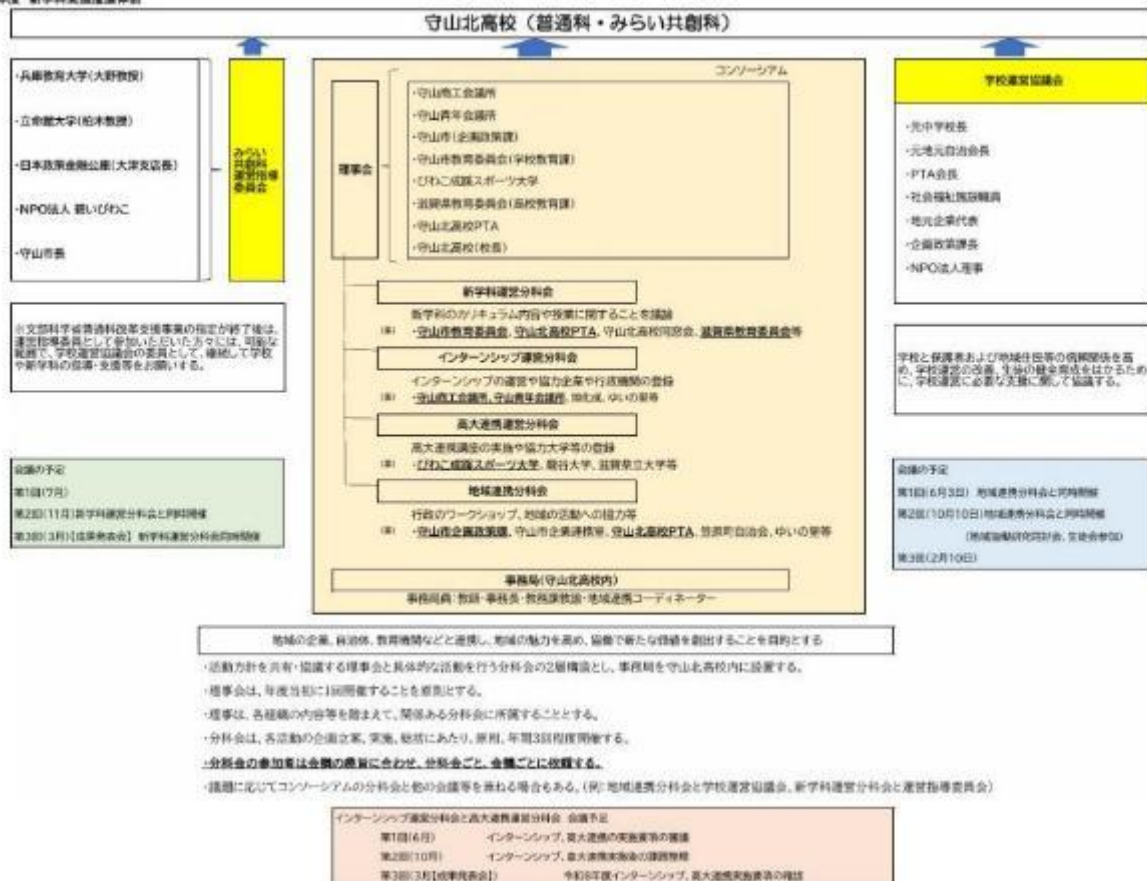
コンソーシアムについては、2年間の準備期間を経て、本年度本格的にスタートした。学校としても、新たな取組を増やしていくだけでは、負担感が大きく、継続的な取組にはならないと考え、既存の会議等をコンソーシアムの分科会として位置付けたり、実を伴う授業連携のための企業連携分科会を開催したり、単なる報告会のような組織にならないよう運営を心掛けた。

実際に地域と連携した学びの運営をする立場からすると、「学校協力（応援）隊」のような組織がベストだと考え、組織や関わる大人が増加すればするほど、その手続きの煩雑化や校内体制への負担も増加していたように感じている。そのため、OB・OGネットワークやこれまでの連携先も加味しながら、ある種の“ゆるい応援隊”のような組織で、授業協力の一斉依頼を出して、連携先の状況に合わせてその返信をいただくような形の運営が、次年度以降できないかと考えている。

また、コンソーシアムの会議を単なる学校側の報告会で終わらないようにするためには、生徒発表や交流の機会となるように環境整備していきたい。以下は、本年度の取組について記述していく。

### ▼コンソーシアム体制

令和7年度 新学科実施推進体制



## ▼コンソーシアム規約

### 地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム 規約

#### (名称)

第1条 本コンソーシアムは、「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム」（以下、「コンソーシアム」）と称する。

#### (目的)

第2条 コンソーシアムは、「ほら、ここに人を想う心がある」と表される本校スローガンのもと、生きる力および地域の未来を担う人材の育成ならびに社会に開かれたより良い学校となるため、地域の企業、自治体、教育機関などと連携し、地域の魅力を高め、協働で新たな価値を創出することを目的とする。

#### (活動)

第3条 コンソーシアムは、前条の目標を達成するため、次の活動を行う。

- 一 社会に開かれた教育課程の実現に関すること
- 二 学校と地域団体との連携・調整に関すること
- 三 コンソーシアムの運営の持続化に関すること
- 四 学校運営に係る協議に関すること
- 五 前各号に掲げるもののほか、学校の諸活動に対する支援に関して理事会が必要と認めること

#### (組織)

第4条 コンソーシアムは、次のように組織する。

- 一 活動の方針を共有・協議する理事会と具体的な活動を行う分科会を置く
- 二 連絡調整を行う事務局を置く
- 三 活動等に助言・指導する顧問を置くことができる
- 四 活動等に助言するアドバイザーを置くことができる

#### (理事会)

第5条 理事会の理事は、別表1に掲げる各団体等が代表者1名を推挙し、校長が委嘱する。

- 2 理事の任期は1年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の理事の任期は、前任者の残任期間とする。

#### (役員)

第6条 コンソーシアムに次の役職を置く。

- 一 会長1名
- 二 副会長2名
- 2 会長は理事による互選とし、副会長は会長が選任する。ただし、副会長のうち1名は守山北高等学校長とする。

#### (会長、副会長の職務)

第7条 会長は、会務を総理し、コンソーシアムおよび理事会を代表する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故等があるときは、その職務を代理する。

(理事会の運営)

第8条 理事会は、会長が校長と協議の上、招集する。ただし、緊急を要する場合においてはこの限りではない。

- 2 理事会の議長は、会長をもって充てる。
- 3 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。
- 4 理事会の議事は、出席理事の過半数で承認し、可決同数のときは会長の決するとことによる。
- 5 理事会は、顧問から運営などについての助言や指導を受けることができる。
- 6 理事会は、アドバイザーを必要に応じて招致し、助言を受けることができる。
- 7 顧問およびアドバイザーは、会長が委嘱する。

(分科会)

第9条 分科会は、第3条に掲げる活動の企画立案をし、各活動を進めていく。

(事務局)

第10条 校内に事務局を置き、コンソーシアムに関する事務を処理する。

- 2 事務局は、分科会の活動の円滑な推進のために連絡・調整・支援を行う。
- 3 事務局員は、教頭、事務長、教務課教職員、地域連携コーディネーターにより構成する。

(規約の変更等)

第11条 この規約は、理事会の議事を経なければ変更することができない。

- 2 この規約に定めるもののほか、コンソーシアムの運営に関して必要な事項は、会長が校長の協議により定める。

(活動年度)

第12条 コンソーシアムの活動年度は、毎年4月1日から翌年の3月31日までとする。

附則 この規約は、令和7年4月1日より施行する。

別表1 (第5条関係)

コンソーシアム構成団体(理事)名簿
守山市総合政策部企画政策課
守山市教育委員会事務局学校教育課
守山商工会議所
守山青年会議所
びわこ成蹊スポーツ大学
滋賀県教育委員会事務局高校教育課
守山北高等学校PTA
守山北高等学校

## 【実施した会議内容】

### (i) 「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム 理事会」

日時：2025年4月28日（月）13：30～15：00

場所：守山北高等学校 校長室

出席者（敬称略）

（委員） 伴氏（守山市総合政策部企画政策課）、  
安田氏（守山市教育委員会事務局学校教育課）、上田氏（守山商工会議所）、  
高橋氏（守山青年会議所）、松井氏（びわこ成蹊スポーツ大学）、  
足立氏（守山北高等学校PTA）

（県教委） 木部氏（事務局高校教育課）

（学校職員） 杉原真也（校長） 柳垣弘樹（教頭） 林敬治（事務長）

#### 協議題

- ・開会挨拶
- ・コンソーシアム規約の承認
- ・会長・副会長の選出
- ・コンソーシアムの設置目的と運営体制（今後の理事会と分科会を含めて）
- ・今年度の重点課題
- ・各理事より提案事項等
- ・その他

#### ○本会議の目的・主旨

- ・地域の企業、自治体、教育機関などと連携し、地域の魅力を高め、協働で新たな価値を創出することを目的とする
- ・活動方針を共有・協議する理事会と具体的な活動を行う分科会の2層構造とし、事務局を守山北高校内に設置する。
- ・理事会は、年度当初に1回開催することを原則とする。
- ・理事は、各組織の内容等を踏まえて、関係ある分科会に所属することとする。
- ・分科会は、各活動の企画立案、実施、総括にあたり、原則、年間3回程度開催する。
- ・分科会の参加者は会議の趣旨に合わせ、分科会ごと、会議ごとに依頼する。
- ・議題に応じてコンソーシアムの分科会と他の会議等を兼ねる場合もある。  
（例：地域連携分科会と学校運営協議会、新学科運営分科会と運営指導委員会）

#### ○今年度の重点項目

- ・学校設定科目「みらい共創」の教材開発（実践、検証）
- ・総合的な探究の時間「もりきた学」の教材開発（実践、検証）
- ・広報戦略の実践  
（学校案内の改訂、HPの更新作業、公式SNS（インスタグラム）の開設（運用））
- ・進路実現に向けてのシステム構築  
（特に総合型選抜への対応（校内の指導体制構築の必要性）→進路指導課との連携）
- ・定量評価の試行実施  
（もりきたルーブリックを継続（もりきた学で）Ai-GROWの導入（みらい共創科のみ）
- ・MKB（MORIKITA BASE）の整備継続 ※予算との兼ね合い
- ・地域と連携した授業の展開
- ・持続可能な体制づくり  
（学校内の体制整備 ※CN任期は最終年度、人が代わっても持続できるシステムの構築）
- ・地域と守山北高校の「みらい共創コンソーシアム」の運用

○主な意見（提案）

- （松井理事）FC今治を例に、高大連携を進める（指定校含む）  
スポーツのボランティア、地域活動など
- （上田理事）冬のイルミネーション、万博  
一方で、市として人材確保も課題（就職希望者へのアプローチ）
- （安田理事）入試にも関わる不安も大きい。中学生への周知、PRが必須。
- （伴理事）守山市の事業をとりまとめて、担当者に配布済み
- （木部理事）今後の体制づくりを支援（私立無償化、公立校の生き残り）  
コンソーシアムの取り組みが1つの指針になれば

（ii）「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム 地域連携分科会」

【第1回地域連携分科会】

日時：2025年6月3日（火）13：30～

出席者（敬称略）

- （委員） 足立昌央 荒川富也 田中義規 津田徹 根木山恒平 服部宣彦 伴康宏
- （県教委） 宇賀貴浩（生涯学習課主任主事）
- （学校職員） 杉原真也（校長） 柳垣弘樹（教頭） 林敬治（事務長）  
山崎仁嗣（地域連携担当）
- （欠席者） 大道和美（教務主任） 高田法悟（CS担当） 林拓矢（生徒会担当）

協議題

1. 校長挨拶
2. 出席者の自己紹介
3. 会長・副会長の選出→（服部氏、足立氏）
4. 学校教育目標・経営の重点、県立学校の魅力化・特色化等について（杉原校長）
5. コンソーシアムについて（杉原校長）
6. その他連絡事項（柳垣教頭）

会議内容

- ・学校の教育目標、経営の重点、県立学校の魅力化、特色化等について（杉原校長）
- ・新時代に対応した高等学校改革推進事業の指定最終年（文科省）
- ・アントレプレナーシップハイスクール事業（滋賀県教育委員会）
- ・地域と連携した主権者教育の充実（滋賀県教育委員会）
- ・アントレプレナーシップ育成プログラム（福祉施設／笠原しょうが）
- ・守山北高校のスクールポリシー（社会的使命）
- ・コンソーシアムの構成
- ・令和6年度の学校評価（本校が抱えている問題：部活動活性化）
- ・学校案内リニューアル、
- ・デジタルガイドブック、学校紹介動画（視聴）
- ・もりきたベースの整備

## 【第2回地域連携分科会】

日時：2025年10月10日（金）15：30～

出席者（敬称略）

- （委員） 足立昌央 荒川富也 田中義規 津田徹 根木山恒平  
（学校） 杉原真也（校長） 柳垣弘樹（教頭） 高田法悟（新学科主任）  
林拓矢（生徒会、地域協働研究同好会顧問） 上田隼也（コーディネーター）  
（県教委） 山本秀一（生涯学習課主任主事）  
（欠席者） 服部宣彦 伴康宏  
林敬治（事務長） 大道和美（教務主任） 山崎仁嗣（地域連携担当）

### 協議題

- 1.はじめに（校長挨拶）
- 2.学校評価（前期）について
  - ・教職員の前期学校評価結果について（柳垣教頭）
- 3.県への要望について
  - ・県への要望書（コーディネーター、外部講師予算等の要求）（杉原校長）
- 4.地域連携に関する具体的な取組について
  - ・地域協働研究同好会の活動報告（林教諭）
  - ・同好会の生徒と委員の意見交流会
  - ・みらい共創科の取組について（高田教諭）
- 5.その他

### 会議内容（まとめ）

#### <学校評価>

- ・学校評価での低い項目をどのように改善していくのか（荒川委員）  
→ 中長期的な項目も多いが、喫緊の課題については職員会議で議題として扱ったり、年度末の総括会議にて共有している。（杉原校長）
- ・部活動の地域移行の度合いはどうか（中学校は進んでいるが）それ次第で、部活動の活性化の方向性が変わるのでは？（津田委員）  
→ 高等学校でそういった取組を進める動きは今のところない。小中学校との連携など、地域スポーツの受け皿になりうる可能性はあると思うが。（杉原校長）
- ・全国的に部活動の地域性はくずれてきている中で、やはり部活動の活性化は学校人気の起爆剤になる。地域への発信をもっと行うべき。（田中委員）

#### <県への要望>

- ・学校主体でのお金集めは許されるのか？（田中委員）  
→ 他県の例では一般財団法人化するパターンもあるが、本校では厳しい。（杉原校長）
- ・守山の北部エリアにとって守山北高校の存在意義はかなり高い。（学校応援隊的な）話し合いの組織づくりするべき。一つの例としては、民間のNPOが主体的に守山北高校のために提携を結んで協力するなどの形はベストかも。（根木山委員）
- ・OB・OGの声掛けから応援隊づくりへ向かいたいが、学校には同窓会もあるので、そのへんとの兼ね合いが難しいかも（荒川委員）
- ・学校独自でお金集めがどこまで許されるのか、これは県の方針次第。ただ、県への要望は継続すべき（津田委員）

#### <地域連携の取組について>

- （林教諭による活動報告後、生徒との意見交換会）
- ・これまでの活動で印象に残っているものは？（根木山委員）

- ・なぜ同好会に入ろうと思った？（足立委員）
- ・学校外の大人と関わってみてどうだった？（荒川委員）
- ・ゆいの里のサードプレイス事業はどう？（田中委員）
- ・今後、来年以降とこんなことしたいとはあるか？（山本委員）

（同好会・みらい共創科の取組・その他について）

- ・以前の写真部に人が集まるという話を聞いたが、同好会に集まればよい。学校周りに法人が多いのが守山北高校の強み。NPOとも連携すれば資金繰りも可能では。広い意味での地域コーディネーターが増えていくのではないか。地域とwin-winの関係性をぜひ。  
（根木山委員）
- ・こういった取り組みをぜひ発信PRしてほしい（田中委員）
- ・おうみんちで1月～3月に脱炭素の畑事業やりますので、ぜひ参加してほしい  
（根木山委員）
- ・中庭の利活用が課題（荒川委員）



### 【第3回地域連携分科会】

日時：2026年2月10日（火）15：30～

出席者（敬称略）

- （委員） 足立昌央 荒川富也 田中義規 津田徹 服部宣彦  
 （学校） 杉原真也（校長） 柳垣弘樹（教頭） 高田法悟（新学科主任）  
 林拓矢（生徒会、地域協働研究同好会顧問） 林敬冶（事務長）  
 （欠席者） 伴康宏 田中義規 根木山恒平 宇賀貴浩（県教育委員会）

大道和美（教務主任） 山崎仁嗣（地域連携担当）

### 協議題

- 1.はじめに（校長挨拶）
- 2.コミュニティスクール事業におけるまとめ・総括
- 3.学校評価アンケート
- 4.その他

### 会議内容（まとめ）

- 1.校長挨拶  
 県予算の配分の公表があった  
 第二回運営協議会で県への意見書出したことも一定の効果があった  
 ⇒ 県から守山北高校に230万程度の教育予算あり

## 2. コミュニティスクール事業におけるまとめ・総括

高田教諭

1年間の取組について

- ・みらい共創科の取組
- ・総合的な探究の時間の取組
- ・進路行事について

(荒川委員)

参観してみて、生徒が楽しそうにしている。発表時はどうしてもシャイになるが・・・

社会の人との交わりを通じての「ギャップ」を大事にしてほしい

フィールドワークの受け入れしてみて、関わった生徒が挨拶に来てくれたり、行政機関の協力関係もできてきた

みらい共創の生徒たちが中学校に行き PR していくとうまくいく（時間かかると思う）

(足立委員)

学校生活の充実ありがたい

自分の子どももナシ園行って、ナシの作り方聞くなど、いい経験させていただいている

(服部委員)

マルシェなどへのイベント参加など、地域に出ていく機会が増えてきた

いい宣伝にもなっている。（地域への理解も拡大）

進路意識への定まりについて、未定が多い現状だが、どのようなアプローチができそうか  
何に興味を持てるかの機会をより多く持てるように指導してあげてほしい

⇒ 学校としてはなにかの“きっかけ”づくりを増やすことが大事

転職も社会の流れでもあり・・・

(津田委員)

学校全体での体験的な取組をしているが、生徒の個人単位でみると、まだまだ達成度が高い生徒と低い生徒の割合の把握

⇒ 総合的な探究の時間は全生徒

みらい共創、同好会の生徒は機会が多い、これを学校全体にどう広げていけるか、縦軸横軸でチェックしていくべき

生徒たちの中で広げていけるのがベスト、もってきたに来てよかったと自覚する

（生徒の力をかりる、生徒同士の横のつながり）

大人が意図していない成果をもたらしてくれる

林教諭

地域協働研究同好会の取組

イベントへの参加深度が高まっている

生徒の成長がみえる（特に大人に対するコミュニケーションスキル）

課題は、まだ生徒主体になっていない（今は大人が引っ張っている）

## 3 学校評価アンケート（柳垣教頭）

学校教員による自己評価について

生徒保護者からのアンケート結果について

## 4 その他

(服部委員)

部活動の加入率はどれくらいか

部活動に加入していない生徒は放課後何をやっているのか？アルバイト？

(荒川委員)

学校の特徴として、進路選択の幅は大きなPR素材ではないか  
もりきたなら色々な体験ができる、経験ができる、社会と接する

(足立委員)

校舎に垂れ幕できないか？(全国大会出場など)



(iii) 「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム」企業連携運営分科会

日時: 2025年10月6日(月) 14:30~16:00 会場: 守山北高校 MORIKITA BASE (3F)

主催: 守山北高等学校(みらい共創科)

テーマ: インターンシッププログラムの振り返りと今後の連携

出席(順不同)

旭化成株式会社(守山製造所)、グンゼ包装システム株式会社、日本マタイ株式会社、  
株式会社三社電機製作所、守山市役所(企業連携推進室・商工観光課)  
守山北高等学校(校長・教頭・みらい共創科主任・進路指導主任ほか)

1. 開会あいさつ(杉原校長)

2. 出席者紹介

3. 今年度の取組報告(学校より)

普通科2年生(希望者)を対象に、4社12名(男子)が参加。

生徒アンケートより

・参加前は「工場=厳しい・怖い」などのイメージが多かったが、参加後は「温かい雰囲気」「達成感があった」との声が多数。

・学びとして「挨拶・マナー」「安全・KY」「チームワーク」「時間厳守」などを挙げた。

・進路選択の決め手は「給与」「興味関心」「能力との適合」。

・来年度(2年次)より「みらい共創II」として単位化したインターンシップ(2~3日間)を実施予定。

4. 企業報告(各社より)

【旭化成株式会社】

生産現場見学、安全教育(VR・巻き込み体験装置など)を実施。

「安全はすべてに優先する」価値観を体験形式で学ぶ。

生徒アンケートでは「日常生活にも通じる安全意識を学べた」との声。

社員との交流で「人との関わり」「働く楽しさ」「自分に合った職業」を考える契機となった。

【グンゼ包装システム株式会社】

工場見学・安全教育・社員交流を通じて「チームワーク」「挑戦意欲」を育成。

色識別体験ゲームを取り入れ、楽しみながら製造現場の重要性を理解。

#### 【日本マタイ株式会社】

会社説明、工場見学、安全教育（危険予知演習）、品質管理体験を実施。  
守山北高校出身社員との懇談も行い、働く実感や社会人としての心得を共有。  
生徒は真面目に取り組み、新聞取材にも掲載。

#### 【三社電機製作所】

「技術道場」での実習と社員交流を実施。  
小型キット制作を通じて“達成感”を重視。  
普通科生徒でもものづくりに触れられるよう工夫したプログラム。

### 5. 意見交換（主な論点）

- ・普通科でのインターンシップの特徴や課題  
工業・商業科と異なり、基礎知識ゼロからの体験になるため、事前説明や安全教育の徹底が重要。学校側：事前学習・面談を整備し、探究学習との接続を図りたい。
- ・実施期間・人数・時期  
今年度：1日実施。来年度：夏休み中に2～3日間（計1単位相当）の集中実施を予定。  
1社あたり3～4名が適正規模。
- ・今後の情報共有・連携体制  
企業側より：「日程・参加生徒情報を3か月前に共有いただくと助かる」との要望。  
報告会に企業が参加できる形も検討してほしいとの意見。
- ・教育的位置づけと期待される成果  
インターンシップを単なる就業体験でなく「探究学習」として位置づけ、地域課題や企業理念を学び、自らの問いを立てるプロセスを重視。  
キャリア形成の初期段階として、2年次での現場体験が有効。
- ・今後の企業協力の方向  
「ようこそ先輩」講話や「市内企業説明会」への参画依頼。若手社員・卒業生による交流会への協力も期待。企業見学・模擬面接・キャリアガイダンスなど、授業との連携拡大を検討。

### 6. 学校からの今後の方針説明

2年次夏休みに「みらい共創Ⅱ」インターンシップを単位化  
（5日間：事前・実習2日・事後）。  
1年次：職業理解のための講話・模擬講義・探究活動。  
3年次：求人票比較・面接指導など進路支援を体系化。  
就職希望者は毎年約3分の1。離職率低減とキャリア意識向上が課題。

### 7. 行政・企業側からの提案・要望

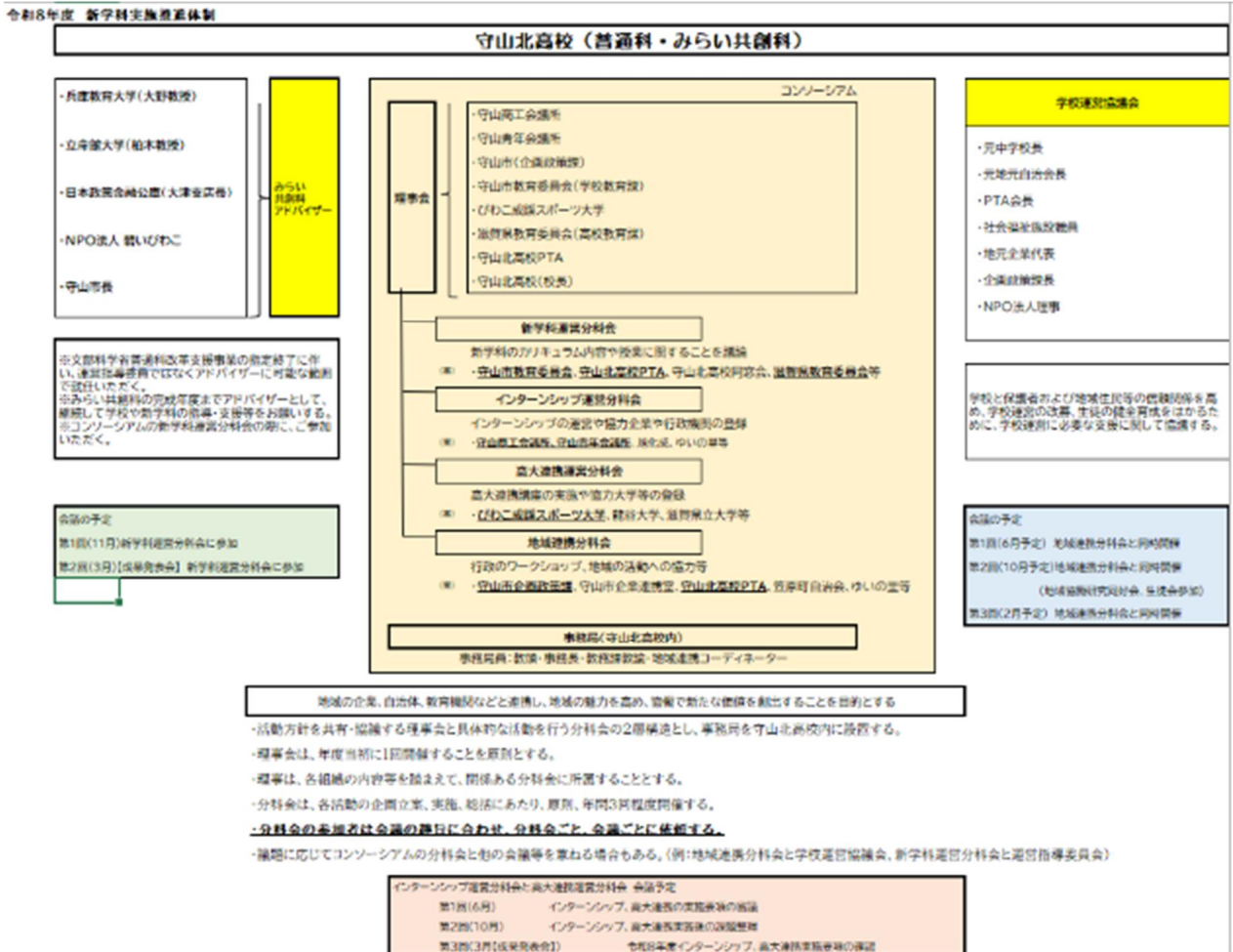
守山市役所より：「公平なマッチング方法の検討を」。  
企業側：「早期に就職希望人数を共有してほしい」「複数日程化により実践体験を増やしたい」。  
卒業生の参加による説明・講話などの要請にも柔軟に対応したいとの表明。

### 8. 次年度に向けて

全体を通して、高校生のインターンシップに関わることに前向きな意見が多かった。一方で、みらい共創Ⅱで考えているインターンシップは2～3日程度のため、受け入れ先によっては少し日数が多いかもしれない点や、はやめに人数と日程を決めたいなど、企業側の思いや運営上の留意点も発見できた。

次年度以降に向けた検討事項

本事業の終了に伴い、運営指導委員会の在り方についても継続的に検討している。新学科の完成年度である2年後まで、運営指導委員会の委員の方々には本校のアドバイザーとして継続的に任用をお願いしたいと考えている。詳細は以下の図の通りである。



## (6) コーディネーターの配置および活動内容

### 今年度の成果

#### 1. 分業体制3年目

本校のコーディネーターは2名体制で学校運営に関わっている。これは一昨年度から継続している形であり、非常勤のコーディネーター2名が、それぞれのもつ知見や技能を最大限生かせる勤務体系であるといえる。2名体制にすることで、それぞれの役割と責任が明確化し、また、学校側の課題に応じた対応が可能である点も、メリットである。また、本年度は過去2年間で準備してきたカリキュラムの授業実践をメインに行ってきた。本事業終了後を見据えながら、コーディネーターの2名が現場の最前線に立つよりも、運営の裏側で分業を行ったのも、本年度の特徴であった。そのため、前述したように、推進室による会議の回数も次第に減らしていく流れとなった。ただし、3学期からは、次年度準備のため、会議の回数は増加傾向であった。

##### 1—(i) コーディネーター上田氏

・上田氏は主にカリキュラムの検討や実際の授業運営における教材の提供や開発に尽力していただいた。「取組の持続可能性」に重点を置き、他校での総合的な探究の時間の運営に関わられた知見を活かしながら、探究学習の基礎的な部分をまとめた自主教材の開発にも取り組んでいただいた。また、地域へのヒアリングを行う際にも、アポをとっていただいたり、アテンドをしていただいたり、地域と学校とのハブ役も担っていただいた。さらにHPの全面リニューアルにも関わっていただいたり、ルーブリック評価の集計、分析を行っていただいたり、一般的に学校教員が苦手とする分野を多岐にわたりサポートしていただいた。

##### 1—(ii) コーディネーター田口氏

・田口氏は、昨年度に引き続き、主に広報デザインの部分に尽力していただいた。本校では広報活動を学校改革の重要な柱の一つと位置付け、積極的な取組を行ってきた。本年度は、本事業終了後を見据え、昨年度作成した新学科タブロイド紙の内容を、学校パンフレットに加味すべく、デザインや構成に関わっていただいた。さらに、今後継続して活用できるような学校PR動画の作成にもご尽力いただいた。みらい共創の授業においても、生徒たちの探究スキルの向上に向けて、問いのデザインの授業を、高大連携で実施していただいた。

#### 2. 3年間の研究まとめ(コーディネーターについて)

新学科および学校全体の特色化に向けた取り組みにおいて、コーディネーターの功績は大きなものであった。ただ、その人選は学校やその自治体ごとに異なることも留意する必要がある。学校の“何”が課題なのか、その部分を明確した上で、必要な人材をマッチさせていく作業が求められる。本校の場合は、以下の3点においてコーディネーターのお二人の力をかりた。①探究の走り出し②広報デザイン③学校組織の課題の見える化である。また、非常勤体制にしたことも、校内(担当者)の負担感を軽減しながらの事業推進につながったと考えている。

##### <成果(コーディネーター視点)>

本事業3年目(最終年度)におけるコーディネーターの成果として、まず、担当教員である高田教諭以外の教員との連携機会が徐々に増加してきた点が挙げられる。事業開始当初は、みらい共創科および特定教員を中心とした関わりが主であったが、授業設計や外部連携、探究活動の相談等を通じて、他教科・他分掌の教員との協働が広がりつつある。これにより、コーディネーターが学校内の一部の取組を支援する存在から、学校全体の教育活動を横断的に支える存在へと位置づけが変化してきた。

また、みらい共創科に限定せず、普通科の授業においても支援を行ったことも成果である。探究的な学習の視点を取り入れた授業づくりや、外部人材・地域資源の活用に関する助言を

行うことで、普通科においても新たな学びの形を模索する動きが生まれた。これにより、普通科改革が特定学科の取組にとどまらず、学校全体の教育改善として捉えられる素地が形成された。

さらに、広報、校内外の調整、外部機関や地域との連携といった観点から、守山北高校におけるコーディネーターの価値を整理・可視化できた点も重要な成果である。教育内容そのものの支援に加え、学校の取組を社会に発信する役割、教員と外部人材をつなぐ調整役としての機能が明確になり、コーディネーターが学校改革を支えるインフラ的存在であることが共有されつつある。

### ■コーディネーターの勤務記録

	上田コーディネーター		田口コーディネーター	
	時間数	主な取組事項	時間数	主な取組事項
4月	20.0	・授業打ち合わせ ・特別授業	7.5	・学校案内のデザイン方針共有 ・特別授業
5月	27.0	・授業見学 ・大学との打ち合わせ	60.0	・学校案内のデザイン制作
6月	20.3	・地域連携に関する意見交換 ・マニュアル作成	—	(活動実績なし)
7月	21.6	・Ai Growの活用に関する 意見交換 ・新学科の経過共有	6.0	・授業資料作成
8月	30.0	・2学期に向けた授業準備	—	(活動実績なし)
9月	24.8	・地域協働研究同好会との 打合せ ・アンケート素案作成	—	(活動実績なし)
10月	21.5	・みらい共創科の教材づくり ・WEBページのリニューアル	3.3	・コンソーシアム分科会出席
11月	24.5	・次年度のカリキュラム検討	2.0	・次年度のカリキュラム検討
12月	27.0	・運営指導委員会対応 ・みらい共創科の教材づくり	4.8	・運営指導委員会対応 ・連携イベント打ち合わせ
1月	42.0	・来年度インターンシップに向 けた教材研究 ・先進校視察	9.0	・特別授業の資料作成
2月	43.0	・地域協働研究同好会 プレイベントの実施 ・ループリックデータ整理	4.3	・イベント打ち合わせ ・県外高校視察対応
3月	38.5	・次年度の教材作成	7.3	・イベント対応

## 課題・次年度計画への反映方針

事業終了後を見据えた課題も明確になっている。第一に、コーディネーターが担ってきたノウハウの一部を教員へ継承していく必要がある点である。外部との調整方法、探究学習の設計視点、広報の考え方などが特定の個人に依存したままでは、事業終了後の持続性に課題が残る。その対応として、実践や知見を体系化し、書籍として残す準備を進めており、生徒・教職員が参照可能な形での共有を目指している。加えて、来年度のみらい共創科の目玉となるインターシップについても、早急な対応が求められている。受入先の確保や学習としての位置づけ、学校内の運営体制の整備など、コーディネーターと教員が中心となって調整すべき課題が多く残されており、事業終了後も見据えた仕組みづくりが必要である。

## (7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

### ■守山北高等学校

#### (i) 学校パンフレットの全面リニューアル

学校PR動画の作成、新学科の広報を加味した学校パンフレットの改訂を行った。これは、新学科の取組だけでなく学校全体の特色化を加味したパンフレット及び紹介動画を作成することにより、担当者が代わっても継続した広報活動ができるようにするためである。前述したように、本校のコーディネーターに協力をしていただきながら、リニューアルを実施した。

#### ▼改訂版学校パンフレット



## (ii) 新学科説明会の開催

日時：2025年6月14日（土）13：30～

会場：守山北高校 もりきたベース

主催：県教育委員会

参加者数：合計 30 名

（所属別内訳） 中学生 10 名 保護者 15 名 学校関係者 3 名 その他 2 名

（市町別内訳） 守山市 23 名 草津市 3 名 長浜市 1 名 不明 3 名

### 流れ

- ・開会挨拶（県教育委員会魅力ある高校づくり推進室 浅岡室長）
  - ・みらい共創科について説明（高田教諭）
  - ・生徒の学習成果発表（1－4 飯田さん、河原田さん）
  - ・体験授業
  - ・質疑応答
  - ・閉会挨拶（杉原校長）
- ※当日の運営に生徒会執行部、地域協働研究同好会の生徒が協力

### アンケート結果

○「みらい共創科」について魅力的であると感じた部分はどこですか。

（複数回答可）（回答数：14）

- ・地域でのフィールドワーク（現場実習）（回答数：8）
- ・社会実装プロジェクト（地域活動の企画、提案、実践、政策提言など）（回答数：6）
- ・キャリアデザイン（回答数：5）
- ・社会課題の学習（回答数：5）
- ・もりきた版デュアルシステム（実践型インターンシップ）（回答数：5）
- ・MORIKITA BASE(もりきたベース)（回答数：1）
- ・その他（他の高校には無い授業

### 参加者からの感想等

- ・生徒さんの発表、みらい共創科の先生、校長先生から伝わる「想い」に感動しました。学科OBが社会に出る頃には魅力ある高校になりそうですね。ある程度学校が手配しているとはいえ、社会学部の大学生が行うフィールドワークに、行政機関が行う環境調査の課外授業などは魅力しかないですね。私が受験生なら志望校にしたいぐらいです。70分じゃ足りないぐらい大変意味のあった学科説明会でした。ありがとうございました！
- ・本日はみらい共創科の説明会に参加し、先生方や生徒さんの生の声を聞く事が出来大変よい機会でした。ありがとうございます。守山北高校を第一希望として考えており、その中でも独自のカリキュラムで勉強できる[みらい共創科]に興味を湧き進学出来ればと考えています。本日は中学2年の子供は、学校外活動のため参加が叶いませんでしたが、次回はずいとも参加したいと考えています。
- ・昔（親）の時代の高校と比べて、実習など取り入れる授業が増えてきているなあと感じている。選択の幅が広がるのがうれしい。この高校だけでなく世の中全般的に机上の学習のみでなくなっているなど実感した。
- ・体験授業が楽しかったです！！



### (iii) 滋賀経済産業協会加入企業との意見交換会

日時：2025年11月14日（金）13:00～

会場：守山北高校 フォーラムハウス、もりきたベース

参加者数：参加企業、団体16社（合計25名）

流れ 13:00 フォーラムハウス（研修室）にて

- ・滋賀経済産業協会 あいさつ

- ・みらい共創科の概要等説明（高田先生）

13:30 MORIKITA BASE に移動（教頭が案内）みらい共創の授業見学  
1年4組の教室に移動（教頭が案内）みらい共創の授業見学

14:00 フォーラムハウス（研修室）に移動（教頭が案内）

14:10 滋賀経済産業協会との交流会・意見交換

- ・守山北高校 あいさつ

- ・事前質問の回答（坂本先生）

- ・懇談（校長・教頭・坂本先生・楡先生・吉岡先生）

- （普通科の就職（キャリア教育）について）や（新しい普通科（みらい共創科）の質問等を想定

15:00 終了

[意見交換会を終えて]

滋賀経済産業協会の方にご協力をいただきながら、今回の意見交換会が実施された。本校としては、次年度に控えたみらい共創Ⅱでのインターンシップの受け入れ先の新規開拓が主な目的であったが、普通科高校での進路支援の在り方や授業見学もあったため、高校教育全体に対する理解を深めることができた貴重な場となった。

### ■管理機関

今年度の「みらい共創科」設置に向けて、本格的な広報活動を令和6年度より実施してきた。管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、中学2年生向け広報チラシを作成し、県内中学校を中心に周知活動を行ったり、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行ったりした。また、令和8年10月には、滋賀県広報誌「滋賀プラスワン」のWEB版記事にて、みらい共創科について紹介いただいた。

6月には、県内中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して、開催した。みらい共創科1期生にも発表や運営に関わっていただき、生徒の活躍の様子も見ていただくことができた。

令和8年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状況は例年と比較してやや増加した。守山市内外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

### 課題・次年度計画への反映方針

令和7年4月に新学科の1期生が入学し、「みらい共創科」の学びが始まった。より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていくとともに、生徒の実際の声や活躍の様子についても発信していく必要がある。

令和8年度は、県教育委員会のホームページや保護者向け情報誌「教育しが」等を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたいと考えている。また、守山市広報や地域密着型生活情報誌にみらい共創科の取組について特集の掲載を依頼していきたいと考えている。さらに、守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域

への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

#### **(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価**

令和4年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高等学校29校のうち地域連携重点により魅力化を図ることを推進する13校で、「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和5年度から開催することとした。初回は令和6年1月23日に開催し、連絡会議の場で守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果検証を行った。なお、今年度は各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有した。

あわせて、年3回の運営指導委員会によって事業の進捗状況や成果を確認し、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てた。運営指導委員会では、1期生の状況や授業、同好会をはじめとした活動の様子、カリキュラムや評価、コンソーシアムの運営、持続可能性等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただいた。会議の際には新たに設置された探究学習を行う特別教室「MORIKITA BASE」を会場として利用したり、自立移動式のモニターを用いたりして、みらい共創科で用いる施設・設備を一部紹介することができた。また、第2回会議では、みらい共創の授業を参観いただき、2学期の取り組みの振り返りを行っている生徒への質問やコメントをいただくなど、直接やり取りする場を設けることもできた。

今年度、守山北高校のコーディネーターは、これまでの2年間で準備してきたカリキュラムの授業実践をメインに取り組んでいただいた。本事業終了後を見据えながら、コーディネーターの2名は現場の最前線に立つよりも、運営の裏側で携わる形で分業を行っていただいた。

#### **課題・次年度計画への反映方針**

学校における取組状況やコンソーシアムの管理運営について情報を共有しつつ、「守山北高等学校研究成果報告会」や、その他成果発表会等の機会を活用して成果検証評価を行い、以後の新学科運営に役立てる。

#### **(9) 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）**

守山北高等学校の新学科「みらい共創科」は、地域でのフィールドワークやインターンシップを軸にした探究活動と、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションを行う活動を中心に、企業や大学、地域等とつながった学びを展開する。また、遠隔で企業や大学、地域等の外部専門家から指導助言等を受けたり、他校生徒との意見交流等を行う学びに取り組んだりするため、これらの学びができる教室や備品等を整備してきた。

教室や備品等については、令和6・7年度に学校の施設改修費や県事業「普通科改革推進事業」において整備を行ってきた。

守山北高校では、令和8年度から実施するインターンシップに向けた体制作りを引き続き行うとともに、コンソーシアムの指導により事業終了後もその体制の継続・充足を図っていく必要がある。管理機関として、これらの学校の取組を支援していく。

## (10) 成果普及のための取組

### ■守山北高等学校

#### (i) 体験入学実施時期の変更

これまで実施してきた中学生向けの体験入学だが、今年度は第2回体験入学の時期を変更して開催した。例年、第1回体験入学を8月下旬に、第2回体験入学を9月中旬に実施していた。これは、これまでの推薦入試の関係により部活動見学を行うためであったと考えられる。しかし、実際に中学生が進路希望調査や受験校検討のための面談を行う時期とはずれていた。そこで、今年度については、第2回体験入学を11月中旬に実施した。昨年度の2倍以上の参加者もあり、想定以上の効果があった。次年度についても、同様の形で実施を検討している。

#### [再掲資料]

#### ▼体験入学の参加者数（一部申し込み人数）

実施年度	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
参加者数 第1回	426	320	215	208	230	331	362
参加者数 第2回	66	中止*	31	44	20	43	116

\*コロナによる中止

#### (ii) 広報戦略

今年度は主にHPを1週間に1回更新することを目標に、情報発信に努めてきた。新学科の取組だけでなく、地域連携の授業や学校行事、総合的な探究の時間などを中心に記事を更新していった。また、運営指導委員会において、在学生や卒業生、保護者、地域の方といったカテゴリー別にページを作成する方がよいと助言を受け、HPのデザインも修正した。

さらに、今年度は新たに公式Instagramを設置した。HPでは写真と詳細な説明文を中心に、Instagramでは日常風景を含めた写真を中心に更新を行った。情報発信については、継続した取組が大切であることから、次年度以降も力を入れて取り組みを進めたいと考えている。



#### (iii) 保護者参観の実施

みらい共創科において、2月に行われた「みらいフォーラム」（生徒の成果発表会）を、みらい共創科の保護者にも案内し、参観していただいた。普段なかなか生徒の様子を見ていただく機会が少ないため、生徒の学びの様子や成長した姿を見ていただくことで、みらい共創の活動を保護者、中学校、地域にも少しずつ広がる機会になると考えている。次年度以降も、開かれた学校の一助になるよう、新学科の推進について検討していきたい。

#### (iv) 視察校の受け入れ

本事業の取組が最終年度になるにあたり、県外から高校視察の依頼があった。本校の取組を紹介するだけでなく、お互いの高校が抱える課題や苦勞などを共有できる機会となった。

※来校された学校

- ・長野県立松代高校
- ・宮城県立中新田高校
- ・青森県立青森北高校
- ・山梨県立笛吹高校

#### [宮城県立中新田高校との情報交換会まとめ]

##### ・探究の推進体制

- 2年「地域産業Ⅰ」（2単位） 担当4名
- 「地域スポーツ学Ⅰ」（2単位） 担当4名
- 「地域防災学Ⅰ」（1単位） 担当4名
- 3年「地域産業Ⅱ」（3単位） 担当4名
- 「地域スポーツ学Ⅱ」（2単位） 担当3名
- 「地域防災学Ⅱ」（2単位） 担当2名

1講座 生徒25～30名程度

探究科目6科目の授業担当が教材開発含めて担う  
教員の3分の1以上が探究の授業に関わる仕組み  
防災やアウトドアスポーツは、前校長と町長の構想によるもの  
\*将来構想会議を設置（校長の人選）

##### ・課外活動の活性化

入学者数に合わせて部活動を再編（数を削減）

1年次の全加入も中止

※放課後等のボランティアを単位認定している（証明があり35時間以上の場合）

地域創造学の中に「ボランティア」という科目を設定\*教育課程表にはのっていない

イベント参加の依頼が来て、学校全体で希望者を募る

→ 総合型選抜でのアピールのため

##### ・コーディネーターの設置

行政機関の支援として、地域おこし協力隊として採用

※コーディネーターが非常勤講師として授業サポート

##### ・探究の評価

Ai-GROWの導入、他類型の生徒と比較すると圧倒的に数値が向上している

##### ・探究のための研究費

学年費+5000円徴収、未使用の場合には返金

または、商品開発販売等による売り上げを活用（企画書必須）

## ■管理機関

「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、今年度は各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有した。

## 課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校が行うオープンハイスクールをはじめとする「学校説明会」の際には、より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていくとともに、新学科に入学した生徒の実際の声や活躍の様子についても中学生や保護者等に届くよう発信していく。

また、地域連携重点校における取組成果や課題等を定期的に共有し、各校における魅力化推進を図る。

## (11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組 (特に予算・人員配置について)

### ■管理機関

- ・国の指定終了後も関係機関と連携を強化したうえで、事業の自走化を図る。
- ・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があり、管理機関である県教育委員会は守山市と協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。また、県教育委員会事務局生涯学習課の令和6～8年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。
- ・地域連携重点校における取組成果や課題等を定期的に共有し、「基本方針」に基づき作成した「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。
- ・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6～8年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「みらい共創科」の学びの継続・充実のための予算確保や、守山市や地域の企業等から費用も含めた支援も含め検討していく。
- ・県教育委員会内の体制や予算等、守山北高等学校が自走していけるよう必要な支援を継続する。

## ■守山北高等学校・守山市

### (i) MORIKITA BASE の整備

昨年度より、探究学習専用の教室として旧大会議室を改修して、MORIKITA BASE を整備し、今年度から本格的に授業で活用した。普段のみらい共創科の授業で活用するだけでなく、他教科でのグループワーク、授業参観、各種会議等でも活用した。MORIKITA BASE は、円卓であり、椅子も移動式となっているため、生徒間での話し合いや発表プレゼンなどコミュニケーションを円滑に進める場として非常に有意義であった。一方で、講義型の授業や講演会（話を聞く）などでは適していない場面も見られ、カリキュラム内容に合わせた運用も考慮する必要があった。



### (ii) 先進校視察（兵庫県立柏原高等学校、岡山県立邑久高等学校）

#### ◇目的と概要

#### ①兵庫県立柏原高等学校（普通科改革支援事業 R4～R6 年度 指定校）

地域社会に関する学科のカリキュラム充実に向け協議を行う。特に指定終了後のいわゆる自走についての意見交換や、本校と同じく普通科と地域社会学科を併置している状況での学校経営や運営と中学生の志願状況について協議を行う。

#### ②岡山県立邑久高等学校

学校所在地の瀬戸内市との様々な連携の取組を充実させ、学校の魅力化や生徒の育成を行っている。総合的な探究の時間を軸に地域探究活動に取組み生徒を育てる学校づくりをされており、本校の教育内容（総合的な探究の時間、みらい共創）の充実の参考としたい。

地域資源の活用や地域課題の解決にむけた課題研究の成果を、その視点を持つ生徒同士が発表を通じて意見交換（Zoom を活用）することができればと考えている。活動を通して新たな研究視点やそれぞれの地域の魅力に気づききっかけになることを期待している。さらにそういった同世代の存在が刺激になり、地域に残り頑張る生徒の育成や地域の将来につながると考えており、県外高校と連携する取組の意義はあると考え、協議を行いたい。また本校の文科省指定期間終了後の自走に向け、行政機関との連携によりいかに経費をねん出したり、工夫されているかを参考としたい。さらに定員未充足の状況から、9年かけて地域との連携を深め、地域協働と探究で生徒を育てる学校づくり、志願者が定員を超える学校へと改革を進められており、広報活動も含め、今後の本校の目指すべき姿としての羅針盤となると考え情報交換を深めたい。

#### ◇視察の記録

#### ①兵庫県立柏原高校

日時 2026年1月22日(木)11時30分～

(柏原高校) 稲次校長

研究推進部 尾花先生、原先生、藤本先生

#### ②岡山県立邑久高校

日時 2026年1月23日(金)10時30分～

進路指導課主任矢野先生、小西主幹教諭、水田コーディネーター

(iii) 本事業を活用しての学校改革の成果（3年間の事業を通して）

新学科設置に向けた取組によって、地域社会との関わりが深まったことは大きな成果と言える。特に生徒が活躍できる場を増やすことができたことが、学校としては重要だったように感じている。「Why this, Why you, Why now」なぜいま、あなたが、これをする必要があるのか、生徒教員が共に共通認識を持ちながらプロジェクトを進める意義を感じることができた。学校教育に地域の教育力を活かすことで、地域活性化にもつながった点も成果の一つである。同時に生徒の非認知能力の向上についてもデータで確認することもできた。まさに、地域を教室とした学びを通じて、地域と高校生が育つ環境づくりができた結果である。また、本校への関心の高まりも継続しており、行政機関の教養講座の講演や広報媒体からの取材依頼も予定されている。生徒と地域が持つエネルギーを信じて、次年度以降の取組につなげていきたい。

一方、生徒同様に「やってみた」結果、多くの課題も見えてきた。学校としては、生徒募集に関わる部分、生徒指導上の問題、学校内組織体制である。それらに関連して、以下の検討事項にて後述する。

(iv) 検討事項

① 探究部の設立検討

自走できる仕組みづくりとして、校内分掌として探究部門の設置が必要ではないかと考えている。現在、本校では教務課内に、みらい共創科主任、総合的な探究の時間担当が3名（うち1名はみらい共創科主任兼ねる）で校務を行っている。しかし、今後2年間でみらい共創科が3学年そろそろこと、連携先が多岐にわたることを踏まえると、教務課としての業務と並行しながらの運営にかなりの負担が生じる可能性がある。新たな取組を増やすだけでなく、現在の学校行事や業務分担も見直し、探究に関わる人員の確保、体制整備は必須である。これは、過去2年間の先進校視察においても、探究部が探究、入試、広報を担っているケースが多かった。コーディネーターの確保が最優先ではあるが、同時に学校内の体制整備も行う必要がある。

② 生徒が活用できる研究費の捻出

今年度、みらい共創の授業を進める中で、生徒のアイデアを形にする過程で、探究に関する予算は存在したが、県費であったため、教員が材料費を購入しに行き、請求書払いを行うというパターンだった。これでは、生徒自身がアイデアの段階での予算規模を考えたり、自分たちで購入しにいたりする経験が得られることができなかった。次年度以降も、同様の取組をする際に、活用できる研究費を確保することが、今後の課題である。

③ 生徒募集

地域と連携した探究的な学びは、学校の特色化につながったが、それが中学生や地域からの高校選択につながったかは検証が必要かもしれない。また、近年の連続した定員割れにより、全日制普通科での学びのモチベーションが低下している生徒の増加も顕著となっている。このことから、本校が目指す教育方針を、地域・中学校とも適宜共有しながら、引き続き本事業で得た知見・経験を生かした学校づくりを推進し、その結果として学校よし、地域よし、生徒よしの「三方よし」の精神を実現していきたいと思う。

## (12) 他の事業との関係

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、令和4年度から県予算において独自に県立高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICTを活用した、専門機関との遠隔授業の導入に向けた研究に取り組んだ。地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネーター人材は欠かせないものとなっている。